

新釋令義解

八九

73

6874

8

新釋今義解第八

永立味均平藏

井上經國藏

潮州 祠官 蘭田守民 著

職員

職員令

彈正堂

新釋今義解 八

部員

新釋令義解第八

水五味均平藏

井上賴國藏

勢州

祠官

園田守良

著



職員令



彈正臺

尹一人掌肅清風俗

謂肅者敬也風者氣也俗者習也土地水泉氣有緩急聲有高

下謂之風焉人君比地習以成性謂之俗焉假有信濃國俗夫死者即以婦為殉若有比類者正之以礼教是為肅清風俗也彈奏内外非違謂内者左右兩京外者五畿七道也依公式令告言

官人害政及在抑屈者彈正受推當理
奏聞不當理者彈如此之類是為彈奏也 事

弼一人大忠一人掌巡察内外糾彈非違
謂内者宮城以内外

者左京兩京即與尹不同尹職掌所謂内外者遠
近既異其巡察彈正之巡察糾彈一亦同忠也 餘

同神祇大祐少忠二人掌同大忠大祐一人

巡察十人掌巡察内外糾彈非違

史生六人使部三十人直丁二人

彈正臺は非法違亂を糾察て常法を守らむる職あり彈は彈劾の義

臺は高き處より昇り非違を伺ひ望む義を以て唐六典小御史臺大夫

之罪惡を伺ふ職に似て臺の義も是を擯せり也唐六典小御史臺大夫

衆人の行事を伺ひ察するは高きより卑きを臨めり見り也和名抄小彈正臺

和名大々須豆加佐とて此職のみ臺といへり廢帝紀天平宝字二年八月甲

子改易格小彈正臺糾正内外肅清風俗故改為糾政臺とあり六典小唐武

改御史臺曰肅政同八年九月小舊號復たり或説小天智御代より御史大夫

臺と爲り糾政字より故の推量あり天智紀あり承相の義を取て糾正の意に

あぬ事大納言の条より此職も後々檢非違使を置きより有名無實の事多し

糾違犯被此皆同但如犯人連日姦盜隱匿彈正之職難任追捕夫今而後刑之有

逃臺使相議遣檢非違使等隨事追捕乃五之為永制とあり猶令外職員考ふ云へ

とへる稱いと多かり令尹官既尹の類あり和名抄長官彈正曰尹加美と

あり肅清は考課令小最肅清所部註小盜賊不起之類也とあり其条云

へ一風俗は其水土の風氣俗民習染の類あり書紀小習俗風俗舊俗を

久尔和散シロカ志和散シロカ訓めり其國ナカ所為の業ノササをふ其業ノササ不善惡奢侈シヤヒある故ユ教ノ入レ紀ニ其善を道ミチす惡を改カめルむニ肅清ソウセイあり此風俗ノフウゾクは即ち京師ノの風ノフウ應神紀ノ十五年云夫國標者其為人甚淳朴也每取山菓食亦煮蝦蟆為上味名曰毛瀝モリシ山中の風ノフウ天武紀ノ多稱鳴のノ其國去京五千餘里居筑紫南海中切髮草裳粳稻ノ俗ノ常豐殖兩收ノ海中の風ノフウ孝德紀大化二年の制ノ人死亡之時若自殉或絞人殉ノ及殉亡人之馬或為亡人藏室於墓或為亡人斷髮刺股而誅ノ此舊俗一皆悉ノ断ノあるノ風俗の義ノ知ル下ノ樂記ノ改風易俗ノ注ノ風謂水土之風氣舒疾勁ノ其剛柔緩急ノ音聲不同ノ繫水土之風氣故謂之風ノ猶下ノ公武令ノ云ノ一ノ註ノ風俗ノ好惡取舍動靜亡常隨ノ君上之情欲故謂之俗ノ註ノ風俗ノは氣習ノあり其土地の川水泉流の氣ノ緩急ノありノ高下あるノ風ノは川水緩急流濁水あるノ其地氣ノよるノ又ノ民人其地ノ居ノ風氣習ノは俗ノ云ノ一ノ山高山平地も多少あるノは自扁僻の氣ノよるノ水辺野邊ノ住める人ノも自然ノ其氣風ノを受け習ノ來て其所ノ為ノ俗ノ云ノ一ノ其たノは人性の緩急高平の癖頗ノありて好惡情欲ノも皆ノからノ各別ノあるノ其ノ辭ノを載て信濃國の俗ノは其夫死亡の日即ち其婦ノ死者ノ從ノかはノむノるノは愛ノ風

氣の惡ノは此習俗ノの類ノを正ノくノ礼儀ノをノ教化ノするノは風俗の肅清ノありノ未女ノ一ノいノりノ内外は宮城門の内外ありノ宮門の外羅城門内ノ賦役令ノ凡ノ在京有ノ大營造役ノ匠之處皆令彈正ノ巡行ノ註ノ宮城内之類也獄令ノ在京繫囚及徒役之處恒令彈正ノ月別ノ巡行ノ一ノは宮城外ノ云ノ一ノ彈正ノ凡ノ宮城内外非違及汚穢者每日忠以下ノ糾察ノ但禁中ノ不須ノありノ註ノ内は左右京外は五畿諸國七道ノ一ノは内外宮を在京國司ノをノあノりノかく註ノせノるノさノうノ誤ノありノ此事ノ忠の条ノ非違ノは非法違ノ乱ノあり天武紀十一年乙巳詔ノ凡ノ糾彈犯者或禁省之中或朝廷之中其於過失發處即隨見隨聞無匿蔽ノ而糾彈類聚國史ノ職官ノ小元明天皇和銅五年五月乙酉詔諸司主典以上並諸國朝集使等ノ曰制法以來年月淹久未熟ノ律令多在過失自今以後若有違令者准其犯依律科断其彈正者日別三度巡察諸司糾正非違若有弊闕者仍其事故移送式部考日勘問ノ考謙紀ノ天平勝安八年十一月丁巳勅如聞出納官物諸司人等ノ苟貪ノ前分作逗留稍近

旬不肯收納由此擔脚辛苦競為掃 非直敗治實亦虧他化且令彈正基巡檢

自今以後勿使更然三代實錄貞觀十二年十一月廿七日甲辰制彈正基復大長九

年十月廿九日格每月巡檢京中並勘記諸司諸院諸家及内外主典以上犯狀

直移式部兵部二省貶奪考錄見あか類の過失犯罪をいふ内外主典とは國司主典をいふ

彈奏は官人の犯失を彈劾して奏聞するをいふ

比彈奏の式様は公式令より親王及五位以上云々事大者奏彈六位以下移所司推判

彈正式凡基奏彈事者不經大政官而直奏聞將奏事者忠諸門告大令今令伺奏事狀有可召者尹以下忠以上共入上

聞とあり此省は糾彈の惣掌ふる故に悉く長官の条を載り彈奏の尹の署名あは其職と云へ

彈正式凡彈親○註より公式令の文は其條云へは掌と云へ員不定められた官職秘抄より弘仁十四年彈正基置大小弼職原抄云大弼一人從四位下少弼一人正五位下と記せ

王及左右大臣者弼已上在基座而遣忠一人於掌上彈弼已上若若有犯者弼已下忠以上共判奏彈彈當理者見之集解其彈親王及左右大臣者若基座無

弼以上官者侍弼以上彈之又云其四位以下不同王臣此皆換基彈之其彈親王及左右大臣者遣忠跪於殿上彈之と見ゆ

大忠は和名抄判官彈正曰忠とあり巡察内外糾彈非違は宮城内外

西京より上り云々如集解忠以下是自巡察人故内外謂宮城門内外

外也於宮門内不合巡察とあり此大忠の巡察は彈正式凡弼以下毎月巡察

勘彈非違東西市並諸寺非違及客館路橋破穢之類凡宮城内外非違及汚穢者毎日忠

以下糾察但禁中者不須凡東西二寺齋會日忠以下向寺糾彈非違

と見え糾彈も同式凡為彈參議以上差忠一人令度馳道是は上文より

坐而遣忠一人於堂上彈之とあり時の凡三位以上有可糾彈而其身不在

事と馳道は朝所の御道より朝儀の時と云

朝堂者云云遣忠目下就其家對彈とあり註内外も尹の職掌も同

かゞ遠近既各別は尹の内外は西京五畿七道と記此条も宮城内外

西京より按長官惣判省事の故に記せと實は大忠の職をいり各別

あぬを神祇官註有別掌者注の義もて深く考へるあり尹の内外は五畿七道と

○

大志を兩京と廣狹 彈正尹は内外巡察の限あるに臨時^{大志}畿内小差遣の制をいへるは本文見え

職官

文武天皇大室元年十一月丁丑令彈正臺

巡察畿内彈正式小凡這臺官人於五畿内之儀預定忠一人然後尹若獨一人參大政官請進止訖即參入被唱定訖還出即作下國符請官印及官符訖教忠云除殺罪之外決之何處は大政官の處分まで巡察使小差發するるときは由除殺罪之外決之と云存獄令の覆囚使集解在京倉庫並令彈正巡察在外倉庫巡察使出日即令按行とあるは五畿のみならず七道小例あり

余同神祇大祐は臺の判官にて其職は大祐と同じけしは省別掌を記すを曉り上の神祇官の条照見せ下

大小疏は主典の官あり疏とは事を取れり 和名抄小佐官彈正曰疏あり 巡察は京中巡察の職あり上註

彈正巡察も糾彈の事悉く彈正の忠と同じは共々巡察の職も同義をいへり 按大目附此巡察は町日附とあるは彈正巡察と儀制令に見ゆ其臺の一同を考課令俗に類して大小各異あり

最註云忠以上及巡察と別ていへり 刑部省の判 彈正式小凡巡檢左右京之日

量狀決計 此巡察より又云凡彈正者月別三度巡察諸司糾正非違寺社彈正違

前三日喚左右京職日將依例巡檢また喚左右京職日將此巡察は日別小巡察

忠以下檢京中非違云云と見え忠以上巡察は告知あり

正臺少疏一員少省巡察彈正二員同十四年十一月癸亥巡察彈正八員減二

員定六員とあるは後大少属を置事し同史小天長四年八月丁巳定巡察大

属正六位官少属大初位官 類聚三代格小天長三年十

言天長三年減巡察二員加属二員既有典員何無史生許之令置三員と

史生を置するは臺と別職ある故なり 彈正史生六員日本後紀大同四

年三月己未減彈正臺史生二員弘仁二年十二月辛未彈正臺置史生六員集解

小弘仁四年六月云史生元六員大同年中減二員今復舊とあるは六員小定め

あり 按此集解後紀とも年月とある傳は誤りなり 故に式部式彈

正史生六員と云ふは異傳あり

正臺史生六人あり

臺掌類聚國史第一小嵯峨天皇大同五年四月己卯始置

彈正臺臺掌二員貞觀二年八月廿一日壬戌彈正臺始置扶臺掌二人と見也式

部式下臺掌扶臺掌各二人使部十五人といひ和名抄下官掌今按隨司有官掌省掌臺掌職之類是也

と云

衛門府 管司一

督一人掌諸門禁衛出入礼儀以時巡檢

謂以時猶有時依宮

衛令五衛府官長皆以時按

及隼人門籍門勝

謂載人名

檢所部糾察不如法是也

為籍載物數為勝

事 佐一人大尉二人少尉二人大志二

人少志二人醫師一人門部二百人物部三十人此

名為内物部為決罪人特置

此府當決罰時皆帶刀劔 使部三十人直丁四人

衛士

衛門府は諸門を番衛主當の府あり 府は兵士の所衛禁律註小宮城門守衛云り

和名抄下衛門府由人比乃豆加佐訓由人比は執負の字衛府は執負ハ弓矢前を

帶さる號あり 和名抄下歩人所帶曰執負其姓氏録左京神別小大伴宿祢高皇產

靈尊五孫天押日余之後也初天孫彥火瓊杵尊神駕之降也天押日余大

來目部立於御前降下日向高千穗峯然後以大來目部為執負部天執負之號

起於此也とある此故事より 執負府といふこと 猶下下ハる佐伯皇極紀三年

宿祢の系照見して

六月戊申中大兄戒衛門府一時俱鑠十二通門勿使往來衛門府の名見

中大兄は天智天皇の御名あり發帝紀天平宝字二年八月甲子制衛門府禁衛諸門

監察出入故改為司門衛とある同八年すま衛門府と改められり類聚國史

職官大同三年八月庚戌衛門府併左右衛士府と此府を停められり此時の議

部と集解古記大同三年七月廿日官奏云廢省官員並減定人數事衛門府右

件謹按今條禁衛官職以時巡檢斯衛士府之職也今衛門所掌不異於此

徒設官員事乖忙劇伏請一從廢省其諸門禁衛出入禮儀及門籍門榜

等事皆令衛士掌之然勅員為名年紀積久廢彼混此雖不改文字仍舊號

曰左右勅員府又門部掌衛士守諸門請亦分配焉勅員府を改められり

衛士衛門の二府を併せてかくいふなり此後同解弘仁二年十月廿八日官符云應改

此官奏諸司多く併せ減せり事上より左右衛士府為左右衛門府事右檢按大政官符云大同三年七月廿日奏狀云雖不

改文字號曰左右勅員府者畫聞既訖者今得散位從五位下大伴宿祢真木麻

呂從五位下佐伯宿祢金山等解備已等之祖室屋大連公領勅員三千人左右分

衛是以衛門開闔業相望請改衛士字以為衛門者被右大臣宣備奉勅

勅告記所申有理宜依件改之再衛士府を衛門府と改めり古記云は姓

左京神別小佐伯宿祢道臣余七世孫室屋大連公之後也雄畧天皇御世以天

勅員賜大連公奏曰衛門開闔之務於職已重若一身難堪望與思兒相併衛

左右依勅奏是佐伯大伴二氏是より左右衛門府といへり式部式衛門式

掌左右開闔之縁也と見えり管司は隼人司あり諸門禁衛は宮城十二門の出入の奸徒濫物を禁む

番衛をいふ番衛は今番の下宮衛令十二門は皇極紀三年六月戊申戒衛門

府一時俱鑠十二通門勿使往來とあると門號は記され皇極門の十二は唐の制度

古記に見えり孝德御代孝德紀朱雀門の名を載るのみあり桓武紀延暦十二年

四月庚午始造山背新宮令諸國造諸門とあり拾遺抄云宮城十二門正南朱雀

之東曰達智西曰安嘉東曰侍賢東之南曰都方北曰陽明西曰崇聖西之南曰

談天北曰殷富と諸門の號を記四面各三門ありをて京師の玉城は十二門の制

と見えり周礼諸門の注十二門と見え班固の西都賦云披三條之廣路立十二通

門といへり前漢の代も十二門あり後漢書百官志云雒陽城十二門とあり隋唐の制も同

唐皇城正南門を丹鳳門といふ
朱雀の字も此義を模し、かへいふ

出入礼儀は官人の諸門を出入する時の礼儀

り出入も客止礼推古紀十二年秋九月改朝礼因以詔之曰凡出入宮門以兩手押地

兩脚跪之載相則立行始て礼制見也相は閭闔下同和名抄云閭闔限也和名

て外内の限をいふ此相を踏入る礼儀あり今俗に云事論語御堂書入公門鞠躬如也如不容立不中門不履闕注礼士大夫出入公門由闕右不踐闕見

見えて中門は門中にて其君の出入せん士大夫避て異邦の載相の古制あり以時巡檢も宮衛令は五衛府官長皆以時按

檢と註し一義ありて時を巡檢の時刻あるをいふ猶宮衛令より衛門式は凡檢按

在京非違者佐一人尉一人志一人府生一人火長九人ありて後制ありて

隼人は此府の管隸をいふ門籍は諸門出入の籍あり俗に門切手礼籍は竹牒にて

宮人の姓名を記せる版をいふ宮衛令は五位以上著籍諸門非著籍之門並不得

出衛門式は凡黄昏之後出入内裏五位已上稱名六位已下稱姓名然後聽之

あり門榜は貨財雜物出入の榜あり榜は木版あり唐六典監門衛の職不織扇儀仗出入

諸門出物無版者一事以上並不得出とあり唐六典監門衛の職不織扇儀仗出入者聞其數以物貨器用入宮者有籍

有勝といふ籍と人姓名を載る礼榜は雜物の員數を載る礼とて同狀あり

ら各別あり佐は和名抄長官衛門等府曰督次官衛門曰佐とあり

大少尉は各二員中務式は左衛門府大尉少尉各三人とあり府の判官あり拾遺抄

月制左右衛門尉各二十五人為定員官職秘抄は保元三年正大少尉各二人後稍益員或至六

七人中古以降又過十人至久安年中下宣旨以左右各二十人為定員近代三倍焉と

あり官職考檢非違條云大少尉は府の主典あり中務式は左衛門府大志

段醫師は元正紀養老三年九月辛巳始置衛門府醫師一人と見之中務式は

左衛門府醫師一人右衛門とあり門部は諸門を執掌の職とて二百員

を置き十二通門令集解記大同三年七月廿日官奏改衛門府門部

者掌衛士守府諸門左右衛士府云衛門府門部今所新隸各百人云門

部一百人令置二百員を弘仁二年十月格は左右衛門府を置き左

右各門部あり中務式給時左衛門府門部六十六人右衛門と見此門部

も名員氏を用ふ制を兵部式は凡衛門府門部先簡員名入色人補之

若不定者五分之一通取他氏名員氏は姓氏録小大伴宿祢大伴連大伴造佐伯宿祢佐伯造佐伯連佐伯直門部連と見他氏を通ず物部物部は犯罪を決罰の爲に比府に置了故に内物部といひて取る後の制をむ

他の物部因獄司より東西市司因獄司物部掌主當罪人決罰註不謂此伴部之色故式部補任其衛門府物部亦同也といへ皆同職なり此条は門禁

を捕ふ集解記古為罪人決罰在此府耳但決罰之時皆帶力也垂領トリモウ捉持者者故一称不解刀行事耳と云り又説又説臨時別勅為支罰決罰も獄令も衛

府府紀提罪人非貫属京者皆送刑部省宮衛令不犯夜者衛府當日決放應贖及餘犯者送所司衛士兵衛二府の罪人を捉らへ決罰も此物部の兼ねありむ衛士は諸門を守

召兵士あり門部は守門衛士は門衛の職なり其員は定まり集解集解衛士數臨時不定時不定より按り威儀の日尋常の時多少は衛士府より充了故に常員を載りしぬ

ふふ一聖武紀天平十三年五月庚申定額之外差加衛門衛士二百人と定額あり是は此項は其員定まれのふらむ大同三年七月罷衛門罷衛門不衛士六百人今定為五

百衛門府門部二百人中務式中務式不衛士定六百人衛門式衛門式九宮城門者並令衛士衛士衛士見也使部式部式式部式不見之此府此府府生を置れし例は下兵衛府兵衛府小云

隼人司

隼人司

正一人掌檢校隼人

謂隼人者分番上下一年為限其下番在家者差科課役及簡

點兵士一

如凡人

及名帳教習歌舞事上

佑一人令史一人使部十人直丁一人隼人

隼人司は多の隼人ハヤヒトを檢校の事を掌まり類聚國史職官職官小平城天皇大同三年正月壬寅詔云隼人司併衛門府八月庚戌制云其隼人司依今年正

月廿日詔書既從廢省併衛門府而衛門府併左右衛士府仍更此司隸兵部
省ありて兵部省の管官とあり
集解衛門府司大同年三月廿七日官奏云
併衛士府と見ゆるは類文を異なれを誤るむ式部
式小兵部省集人司と記せり
集人は大隅薩摩の二国をめぐる極き人なり

名あり波夜は伊知波夜岐とあり
波夜岐義とて猛きとあり詞あり
同く後には西京畿内にも遷り住居する日本後紀延暦元年六月壬寅停太宰
府進集人を見えり此京畿の集人を簡ひ充る事とありけむさて集人小大衣番上

余の三色あり
大衣の號は集人のみから門部近衛府生にも上號とありて徳門府式も九
給大衣録並奏請色同近衛府式近衛府式小九兵衛三十人三年一

別樣帛三丈一尺帛三丈一尺近衛二百人紺細布二丈一尺とあり大衣の義は校
近衛の人別二丈一尺は常服の制とあり大衣は古く大隅集人阿多集人とのみ
三大一尺とて縫裁は常制より寛大の名とあり

記して此號は後の制とて其長小大衣を給ひつるをもて名は負よりけむ
官人の長上
今昔の如くあり

叙と見ゆれ此時より停めらるる集人司式云九大衣者擇譜第内置左右各

一人大隅薩摩左
阿多集人若有關者由少省即申官補之此集人も名買氏人を拜する所あり

續後記承和三年六月壬子山城國人右大衣阿多集人逆足賜姓阿多忌寸と
記せは此項は既く山城に住居する集人を取て其本つ國あるをいひ取らぬ事と

つるや九番上集人二十人有關者取五畿内及近江丹波紀伊等國集人幹了
者由省補之凡今來集人身亡者擇取畿内集人充之二十人為限と見ゆ省は兵部今

來を新ふ番上と任する集人にて別色とあり
書紀新漢を伊万岐乃阿夜と訓て
今來も同く即ち新考と云ふ如く

集人の相替る本國より番上するも齊帝紀天平宝字八年正月丙辰大隅薩摩等集人
相替授外從五位上前公平佐外正五位下薩摩公鷹白薩摩公宇志並從五位下と

あり
此三人は集人の長とあり薩摩公は和名抄り薩摩
國阿多郡阿多とあり阿多の集人と見ゆ相替る制と註あり
註此集人は今番にて上目下

日あり一年を限り相替るなり其番不任せられぬ集人の家る在ては其國の課役不差違
され兵士も簡ひ充る事凡民の制と同じ上番の日は皆免さる事とあり
集人は狗人として良

あり凡れは一如凡
人とも良人を知らぬ此集人の始は神代紀
釣釣を失ひ給ふ条
火酢芥命云伏罪曰吾已
過矣從今以往吾子孫八十連屬恒當為汝排人一云
是以大酢芥余苗裔諸集人

等至今不離天皇宮牆之傍代吠狗而奉事者也。此故事より狗不代吠了
姓氏録云山城神別阿多集人富乃須佐利乃余之後也。見え集人を專務とす。の住め。國を文武紀大室三年十月丁酉唱更國云注。今薩摩國也。
とあり。夜更の時狗の如く集人式。凡大衣服、道集人催造雜物候時、令吠。雜物は吹唱ふ義を以て名を負たなり。集人式。凡大衣服、道集人催造雜物候時、令吠。同式。紙筆十枚を竹器を作し、いへり。凡今集人令大衣服習吠左發本声、右發末声、惣大聲十遍、小聲一遍訖。一人更發細声二遍、と吠る聲を記し、又云凡元日即位及蕃客入朝等儀、官人三人、史生二人、率大衣服二人、番上集人二十人、今來集人二十人、白衣集人一百三十二人、分陣應天門外之左右群官初、入自胡床起。今來集人發吠聲三節、蕃客入朝と威儀の目の制をいへり。白衣は庶人の集人、小て入二人番上二十人、今來二十人、小て四十二員ある儀。日は其員定う、白衣服を取充て、一百五十四人の門の左右小分列し、あむ集人式。凡大儀者豫前申官喚集諸國集人令候其事、と見え。此令の時、集人の員數は載る、其の考ふべき。蕃客入朝、吠る儀、あきは皇國の風俗、なれど異國の礼制、少省うべき。
又云凡踐祚大嘗日、分陣應天門内、左右其群官初、入發吠、凡遠從駕行者、其駕經國界及山川道路之曲、今來集人為吠、凡行幸經宿者、集人發吠、但近幸不吠。

といひ、即ち不離天皇宮牆代吠狗と稱す、を摸せしものなり。威儀の日の服、同式。大衣服及番上集人若當色横刀白赤木綿耳形髪、白赤二色を組て輪の如く、自餘集人皆著大横布衫。襟袖著面襦袢布衫著面襦袢。非帛肩巾横刀白赤木綿耳形髪、執楯槍並胡床と記せる衣服、大の狀とす。其の考ふべき。同式。凡大儀給裝束の条、集人各肩尺襟袖並袴襦料、西面四尺四寸、衣四尺、袴四尺、凡威儀所須横刀一百九十口、楯一百八十枚、太槍一百八十竿、胡床一百八十脚、並取司臨時出田其楯枚別長五尺、廣一尺八寸、厚一寸、頭編著馬髪、以赤白土墨畫釣形といふを見渡し考ふに、耳形髪は大耳の狀、袖袴小襦袢、あは四足を摸し、釣形は古失釣の緣あり。名帳は大衣服番上、今來其餘京外散在の集人、さう、此四色の大衣服番上は職掌の色、今來は毎年京上の集人、さう、一年を限り、其國小罷歸り、交替の狀、衛士も同か。下古制は大衣服以下、毎年交替せしき、衣糧を給ふも、今來のみ、さう、集人司式。凡今來集人給時服鹽、其糧毎月一給、男日黑米三升、女日番上集人不在給時服及糧之限とあり。番上は常糧の定まり、別給の例あり、かく入色白衣の集人の奉仕不仕悉く籍帳に載り、下高野紀神護景雲元年九月己未、集人司集人一百十六人

不論有位無位賜爵一級集解古記延曆四年十二月壬寅公卿奏議曰隼人男
女各四十人每減二十人男男女女各減は衣糧を給ふ隼人此時二十此外

考帳計帳あり兵部式隼人二十人省隨其解移守官勘籍補之其考帳
者每年送省隼人其功程の考撰をいふ隼人司式隼人計帳者五歳内並

近江丹波紀伊等國每年一通附大帳使進官省其班田之年並進田籍を皆
口分田を給ふ故あり教習歌舞は隼人の長の教て餘の隼人習はむるを

歌舞師は置太衣の隼人今未だ習ひたる集解其歌不在常人之歌
舞司則也此頃其歌傳ふるを各条に歌舞といふ舞の云ふはあらず古

一歌詞は有此故事は神代紀兄火酢芹余云云昔續鼻
以緒塗塗塗面其弟曰吾汚身如此永為汝排優者乃舉足踏行學其溺立狀

初潮漬足時則為足至膝時則舉足至股時則走廻至腰時則捫腰至腋則置
手於胸至頸則舉手飄掌目爾及今曾無廢絶とある此狀を舞とありて

紀養老元年三月甲午天皇御西朝大隅薩摩二國隼人等奏風俗歌舞授
位賜祿同七年五月甲申賜饗食於隼人各奏其風俗歌舞首師三十四人叙

位賜祿各有差隼人司式九踐祚大嘗日依紀群賀隼人司官人並彈琴

吹笛擊百子拍手歌舞人等彈琴二人吹笛一人擊百子四從興礼門參入御

在所屏外北面奏風俗歌舞主基入百子は和名抄小拍子拍打也拍板類聚國

史職官部延曆二十四年正月永停大替隼人風俗歌舞大替は考試すも隼

同四年三月己未加置隼人司史生二員元慶元年十二月十七日詔置隼人司依一
員復旧也見ゆ此後史生も増置れつゝ式部式隼人司史生五人權三人其二

緒は
赤土

使部四人見

隼人は在京の大衣番上の隼人あり下大隅薩摩あり其本

国小管隼人

隼人式五畿内並近江丹波紀伊等の国に住る事見ゆれ此口男女各来男女をいふれと古は本國より上京の隼人を此司の掌るあり

左衛士府 右衛士府准比

督一人掌禁衛宮掖 謂掖者正門傍之小門也 檢校隊伏以時巡

檢衛士名帳及差科 謂差配兵庫大藏之類也 大備陳設 謂大備禮儀陳

設兵 車駕出入前駐 謂導引也 後殿 謂在後 事

佑一人 大尉二人 少尉二人 大志二人 少志二人

醫師二人 使部六十人 直丁三人 衛士

左衛士府は諸国より上番の兵士を掌り宮門掖垣を守衛する故に衛士府と云ふ軍防令に凡兵士向京名衛士と見え 衛士の事は廢帝紀天平宝字三年八月

甲子制に左右衛士府率諸国勇士分衛宮掖故改為左右勇士府とあれ後舊號に復り集解大同三年七月廿日官奏衛門府一從廢省又門部者

掌率衛士府諸門亦請分配左衛士府各其主帥六十人今廢之衛士六百

人今定為五百人右衛士府准此とあり 主帥六十人は衛士此時衛門府を併せ

一弘仁二年十一月廿八日已未官符此府を停め又衛門府を併せりは上府云々如 又左右衛士府の左右を摸り左衛門府右衛門府の號あり 右衛士府

准之は本註あり上の左大舍人の左右をいふは宮掖の左右の方を已て守衛と云其餘は左衛士の如くあり 下の兵衛府も同じ 禁衛は上より下 宮掖は宮門掖門

あり宮門は正門掖門は正門の掖より小門をいふ漢書注小掖門正門之傍小門也と
掖庭より殿の旁垣を掖垣宮闕の傍の小門をいふ掖集解允非正門有宮掖
門といふ人の肘腋をの如く正當の門ありぬをいふ

之處者皆率衛士可守也大同三年宮符云禁衛宮掖以時巡檢斯衛士府之職也

とあり按小宮門は宮闕の外重掖字も宮牆四面の守護をいふ門のみ小隊
伏は衛士の主師母隊の儀仗ありは兵器の名隊宮衛令註不用之礼容為儀仗用之

征伐為軍器と見ゆ衛門府式大衛士横刀弓箭自朱雀門外至于第一坊門傍路

衛士隊之主心率衛士以上隊於東西諸門及餘腋門とあり此項は衛士府も衛門府

る隊は此府の檢校は隊仗の欠少を檢察あり以時巡檢は佐以下官人の

遺制あり時を令て所部守護處を巡り檢察をいふ軍防令即衛府各檢所部及諸門也

後紀殘編云弘仁二年十月詔曰衛士兵衛四府宮掖是守戒嚴不輕所以敬慎

姦邪防遏虐猾と記せり四府は衛士兵衛衛士名帳は此府より衛士の姓名帳

を本府より故に掌せり元正紀養老三年五月庚申定衛士數國別有差とあり

今文小員數ふけし猶下軍防令云一差科は衛士を差一防衛を科するといふ

此御代より定められし軍防令云一軍防令云三府宮衛令小九庫藏門及院外四面

恒持伏防固註謂令配衛士令見守護也と見ゆ註いふも大備陳設は

大儀の日礼容を備へ置伏陳列し設け備をいふ宮衛令小九元日朔日若有聚集

及蕃客辭見此皆立儀仗衛門府式大儀謂元日即位及受蕃國使表其日寅二刻近衛府

始擊動鼓以次相應即令裝束督以下武礼服云督率尉以下隊於會昌門外

左若蕃客朝拜者衛府の武服をきて陳列は大備といふ集解大備謂

故云大備陳設謂不限大小惣車駕武官礼服は衣服令不見り車駕出入

也と行幸の事いふは誤言あり天子の御輿出行還御て儀制令小車駕行幸稱宮衛令小九車駕出行兵衛衛

士先按行註不出幸於京外也とあり行幸は京外京内先驅は衛士先按行

小車駕先行て引き道守をいふ詞あり周礼大僕の条王出入則自左馭而前

と神代紀皇孫天降坐の条先驅を美佐岐波羅比とあり元正紀養老三年十月金又親

王衛

閤門以時巡檢車駕出入分衛前後及左兵衛名帳

門籍事 佐一人大尉一人少尉一人大志一人少

志一人醫師一人番長四人謂依文番長者左兵衛

四百人使部三十人直丁二人

左兵衛府も多くの兵衛を率い宿衛番直一宮閤門を合番支配を掌りて檢校
寮にて采女司采女檢校隼人司檢校和名抄兵衛府を由比乃豆加佐と訓了
隼人の雜事差配を専ら檢校といふなり
も弓箭を習て番直の義あり
五府は兵士を分配し弓箭を人別し具ふ
故
用明紀元年五月三輪君逆乃喚兵衛重鏑宮門拒而勿入とあり兵衛

豆加乃止利とよませり兵士宿衛のより後同訓と定められし執員の

故事刑部省の訓も後改められし例は其
条にいへし執員の故事は衛門府あり廢帝紀天平宝字二年八

月甲子の制左右兵衛府折衝禁暴虎奔宣威故改左右虎奔衛と見ゆ
るを同八年ふも兵衛府といへり
折衝毛詩傳云武臣折衝曰禦侮言欲衝
突為害者能折挫之也字書重衝突也とあり
周礼夏官虎賁氏注王出行虎奔主居前後雖群行亦有局分といへり此
虎賁は扞衛の職と猛士あり局分は部分の如し此兵衛の職に似たりと號せしむ
兵衛府も左方と准へ知し督一人此督は古く率といふ元明紀和銅元年從

五位下佐伯垂磨為左兵衛率從五位下亮向色夫為右兵衛率孝謙紀天
平勝宝元年左兵衛率正五位下鴨角定とふ人あり此後天平宝字元年從五
位上早部麻呂為左兵衛督從五位下石川人公為右兵衛督とあり後ふは
督字を用ひ率を記せる例を見ゆ
督は唐制都督諸軍事と見ゆ都督の義
率は天智紀七年より粟前王拜筑紫率とあり
大宰帥を率師も同義とあり唐東宮坊下左更率とあり
多く官名小率字を用ひられしは督率も異名の同義と云ふ
按て率字二處皆誤
めりともききえん大宰令兵衛率と記せり養老令刊脩の日兵衛督と改め

載るにけい 孝謙紀天平宝字元年五月丁卯勅小養老令を始て施行の 檢校の事

は上云云 註云兵衛上番毎小檢校といふ分配の意をいへり 兵衛は番直の人より

上番らに又非違食料請假の雜事 此府閤門の宿衛を門籍門勝在りて本文門

勝を稱する略文より更小衛門府を別例をきくより門勝といへり此註説

の處より此處に注せしは 分配閤門は兵衛を左右分配此門の四面を宿

衛を稱する 陰陽寮民部省の註も同例をきく 閤門を舒明紀云津美加上といふ集解云閤者

御在所内重門也とあり 閤を根本に閤を誤り此閤閤二字は混ひやと 和名抄云閤

は柵也和名多奈閤は雅小閤謂之閤と見られ其義

唐正衙日換伏入閤 政前殿謂之衛衛在伏紫宸殿便殿也謂之閤朝至不御前殿而御紫宸殿謂之入閤

則百官亦隨以入 東西門を閤門と云南方大門は然るに儀仗は東西門より入る故あり雅小閤も閤と

云も正閤と云ふ稱なり然るに大極南門といふと此大門も衛門府の番衛なり

猶いとも後世不前大政大臣致仕の後小隱居の地や大閤といふ法軀を禪閤といふも正門と

ら同館傍門の地 宅に住むといふ稱あり 閤門は樓門の状を造る諸門も同かきさるふと 則篇不

天子之閤注云閤 元明紀和銅三年正月丁卯天皇御重閤門賜宴於文武百官重

仁紀室龜八年五月丁巳天皇御重閤門觀騎射 五位已上於閤門前幄とあり

桓武紀延暦四年正月丁酉朔天皇御大極殿受朝云始傳兵衛叫閤之儀と見え

閤は守門の人より車駕の先行兵衛官人の門者を叫び閤門の義を告る儀と云ふ

門部一人守大極殿とあり 大儀の日御輿は八省院北門より入る大極の後房より入御

其後正殿より出御朝見の例と云ふ叫閤も此閤門なり 大極殿は天武紀に

小安殿と云ふ 天安殿と記後房代

衛護をい集解小遠幸行者必以左為前以右為後也近幸行者隨便為前後也

とあり此集解小遠近をいふは京外と遠とと國境をまわ宮中京内を近とと國境を

一繼射紀小設兵杖夾衛來輿とあり夾衛兵杖 兵衛式不允駕行之日分配兵衛者御

南整容儀蹕前駟奄然而至と云ふ如く 輿長二人不帶御膳前二人御馬副二人自餘陪陣

輿長は乘輿を挽持つ丁の長

と云ふ大舍人の外列小環と云ふ

と云ふ

と云ふ

と云ふ

左兵衛名籍は左府より兵衛の姓名帳を掌るやいふ右方も准(知)て 此左字本 居宣長本

小愆字といふは中くたうす左兵衛府の兵衛をいふ 大少尉各二人集解古小延曆 記

十八年四月廿三日官奏左兵衛府今加少尉各一員少忠各二員中務式給時 服小左右

兵衛府督佐大尉各一人少尉二人太志人少志二人見 官職秘抄尉大少各二人後 稍多加員至久安年中下宣

旨以左右各三十人為定員近代或及三四倍焉拾芥抄保元三年正月制 醫官師は 左右兵衛府尉各三十五人為定員とあり尉を多置すは令外官職考より

元正紀養老五年六月癸卯始置左右兵衛府醫師各一人中務式左兵衛府醫師一

人見 官位令此醫師を 載たは後の追書あり 令後府生舎人の二職諸衛に置けを聚め記とて

三代實錄元慶五年五月十三日敕遣左衛門府生五位上大曰佐門繼右衛門府生徒七

位上善友朝臣益友と見 衛門府 中務式左衛門府生四人左兵衛府生四人近衛府生六

令記せは右府も各同か 衛士府は既に罷り 近衛府は令外官より 類聚国史 職官 小聖武天皇神

神五年十月壬寅制云衛府府生者省補焉 兵部 其始の詳は兵部式に諸衛府

生以上雜補任者省具錄移本司奏聞然帶仗とあり此府生は諸司の史生同 衛府の記 事官あり

舎人も始め置きは知れり兵部式に九諸衛舎人祿銀者有位ハ口無位四口

九六衛府舎人被解却者得考選載季祿 兵部 事記せ 番長は兵衛を率ひ

宿衛の主師ある 下 日夜番直の上下ま直不直 四員あるは四番ふて宿直と

諸司も皆四等ありて 中務式小兵衛府番長四人あり 兵衛式 兵衛四百員集解云

別 註此番長は兵衛の員の外別置置故あり 集解は番長者兵衛 四百之數内也 兵衛の中より

簡ひて其兵衛毎番一百人を率ふ 番長四人兵衛四百人は是よりえり 此四百の中より取充すは番別一百人の數

小足らされえ註り 別 中務式小兵衛府番長四人あり 兵衛式 兵衛四百員集解云

大同三年七月省官員左右兵衛各四百人今定三百人中務式 給時 服 兵衛府兵衛二百人駕

輿下五十人 右兵衛 府准此 兵衛府式兵衛三十人三年一給大衣並錄奏 諸大長は集人 兵衛

四百人番長四人横刀緒料 深緑帛人別七尺五寸 隔二箇年 奏請とあるは按ふ此兵衛

三色 大長三十人は兵衛の長二百人は番上 大長三十人の制を按は此頃より

府小三百人を置 兵衛式は四百より左右二府 軍防令より 兵衛は其惣數見えん

六衛府は衛門兵衛 近衛各左太ありて 六府あり

凡兵衛者国郡簡郡司小弟強幹使於弓馬者郡別一人貢之ありて諸國郡司の才武は弟の
勇健騎射より貢進し事あり兵衛府式凡擬兵衛者預擇定使弓馬者入色二十人以
下白丁五人以上修養退内侍奏訖即遣勅使試其才藝騎射一尺五寸的皆中者為及第
步射四十六步十箭中的四以上者為及第若一箭不中皮者以二的准折なり又射馬の
左馬寮 右馬寮 使部は集解大同三年使部三千人今定十人なり
准此

頭一人掌左閑馬調習養飼供御乘具

謂是即自内藏寮所送者

其在大藏賞賜之料亦同送也

配給穀草及飼部戸口名籍事上

助一人大允一人少允一人大属一人少属一人馬

醫二人馬部六十人使部二十人直丁二人飼丁

左馬寮は御料賞賜の馬を養飼せしむる

上文兵部省の兵推吉紀元年皇后馬司はしむる

巡行禁中監察諸司至干馬官乃當厩戸云と記す

馬司は既に見え元明紀和銅四年

十二月壬寅以從五位下葛木王補馬監と記す

天平三年十一月も一寮あり養馬の

令左左右を合置れしむる此令左左右を別載せしむる後には一寮あり

左馬寮式あり

官職抄抄大同五年正月併左右馬寮為一とある此時併せしむる後左馬寮の官名は猶在り

頭は左馬

頭あり

馬寮一同あり後左馬頭右馬頭の名の

左閑馬は左寮の厩閑より養馬

あり閑は養馬の舎より厩と云ふなり和名抄厩

和名無馬牛舎也と見え閑は記す

周礼大僕小天子十二閑注云閑馬閑也漢百官志云閑駒監注云閑閑養馬之所

と閑は馬留の所なり春秋左氏傳成公九年注疏云每厩一閑閑者二百十六匹と云ふなり

も調教を習はしむるあり厩收令九軍團官馬本主欲於郷里側近十里内調習聽本主

者養馬之在事也といふ左右馬寮式四月廿八日御監駒式當日早朝調列權飼街馬八十疋國飼三十一

乗試みて調習せしむる

御監駒式

當日早朝調列權飼街馬八十疋國飼三十一

之用非常之備掌守之司不可充備望請令史生帶劍備于非常者右大臣宣奉勅依請始許
兵部式左右馬寮兵庫寮史生補任之後省移本司即令帶劍見えて帶仗の官
とあり馬部は馬を飼ふ伴部より飼丁と簡ひ充了例あり諸司の伴部同制と見
欽明紀工匠馬飼首男依姓氏録馬工連馬寮式凡馬部三十人取員名入色
續姓氏録馬飼造馬寮史見ゆ此氏あり馬寮式凡馬部三十人取員名入色
者充之兵部式左右馬兵庫等寮掌使部馬部並省補之見ゆ兵部省の判任ありし

飼丁は飼戸丁なり

此丁は飼戸丁と馬戸丁と二色あり

和名抄圍人養馬者也

和名無万加比

日本紀云馬子同上あり

今も養馬の人を馬子と云ふ

履沖紀五年九月河内飼部等從駕執轡先是

飼部之黥未差云ト之北曰惡飼部等黥之氣故自是後頗絶以不黥飼丁而止之見ゆ

飼部は其面を黥して良色と云ふ制あり

飼部犯罪の事を黥して此後

飼部は其面を黥して良色と云ふ制あり

も飼部はやむ事ときえて元明紀和銅六年四月甲戌讚岐守正五位下大伴宿禰道

足等其部下寒川郡人物部乱等二十六人庚午以來並買良人但庚寅校籍之時設

涉飼丁之色自加覆察就令自理支證的然云請從良色許之

庚午は天智紀九年庚午年籍を作れり

庚寅は持統紀四年此時戸籍を作れり

光仁紀室龜元年八月戊午初左馬寮馬部大豆飼磨口誣告河内國人川邊

朝臣宅麻呂男杖杖等編附飼馬宅磨累年披訴至是始著因除飼馬之丁聖武紀天平

十六年二月丙午免天下馬飼雜戶等因勅曰汝等今員姓人之所耻也所以原免同於平民

但既免之後汝等手伎如不得習子孫弥降前姓欲從卑品飼部の色を原免されて

良色と云ふを孝謙紀天平勝宝四年二月己巳格下尋檢天平十五年以前籍帳每色差茶

依舊役使と云ふ舊色と云ふ飼戸馬戸の二色を考ふる飼戸は飼丁と此寮

不隸集解天平勝宝三年官符云馬飼者悉免雜徭如旧作番上下左右馬寮

國與本司共檢校勿令遺漏とあり檢校は每番の上下より馬戸は厩牧令下獲下每馬一人

註以馬戸丁充之凡馬戸分番上下より作番上下は飼戸と馬戸と通はし集解別記云左馬寮馬

飼造戸二百三十六戸馬甘三百二戸右馬寮馬甘戸三百三十戸馬甘二百六十戸右馬甘造等

仕寮者為伴部免調雜徭不任者取調其馬甘為雜戸免調雜徭以前雜戸品部戸莫

差兵士但品部或當品部或差又更年代充品部とあり但以下は脱文あり詳か不詳なり

番役不當 差科のこし有とし一年限満の後には旧色も復さずとの
事なるに更なる遠國の使より人防より差違も其限年を計る故に
此解り雜戸品部戸二色も別
品部は銅丁雜戸
は馬戸と云ふ
左右馬寮式飼戸山城国六烟大和国四十烟河内国一百八烟美濃国
三烟尾張国九烟右隸左
馬寮 右京職三烟山城国五烟大和国四十九烟河内国五十一烟攝津国
十六烟美濃国三烟右隸左
馬寮 となりて馬造馬甘の差別を計る
集解 兩色一千二十八戸ありあき
式二百九十三烟とあるは減損せり

左兵庫寮 右兵庫寮 寮准此

頭一人掌左兵庫儀仗兵器安置得所 謂依軍防令
凡軍器在庫

皆造棚閣安置 出納曝涼及受事覆奏事
色別異所是也

助一人大允一人少允一人大属一人少属一人

使部二十人直丁二人

兵庫寮は武器兵仗を藏むる庫を掌司司より兵庫は武
天武紀朱雀元年正月乙卯難
波大藏省失火宮室悉焚唯兵庫寮不焚見あり此寮跡は孝德御代より置けり
ふふむ孝德紀大化元年八月庚子詔云云於閑曠之所起造兵庫收聚國
郡刀甲弓矢同二年正月云云是月遣使者詔郡國脩營兵庫あり
兵庫此時より始て都地より
造り武器を藏めしむ
集解 記小大同三年正月廿五日格より内兵庫寮
造兵司鼓吹司を併せ昌泰元年格より左右兵庫を惣為一寮のより見ゆ是
より兵庫寮とのみいへり
延喜より兵庫寮式を載て左右の號より
官職秘抄より此格文をもて同し狀より此後扶桑
略紀小天曆二年十月廿七日 禁省失
火の条 小兵庫累代戎具皆以燒亡と記せり
儀仗兵器は宮衛令儀仗軍器註施之礼容為儀仗用之征伐為軍器と有り文
武紀太皇元年春正月乙亥朔天皇御大極殿受朝其儀於正門樹鳥形幢
左白像青龍朱雀幡右月像玄武白虎幡蕃夷使者陳列左右文物之儀

於是備矣。あは儀物なり。兵庫式元日及小構建室幢等。幢は旌旗之属と云。同式。

鳥像幢。日像幢。朱雀旗。月像。白虎旗。青龍旗。玄武旗。見えり。すく丸大射建。

礼幡。此餘花槍。執伏。は弓箭。乾槍。兵器。は大鼓。鉦。鏡。楯。大山。角。挂甲。の類なり。羅幡鳥羅阿

安置得所。伏器を置く所。色別。棚。棧。を作り。穀。糶。をぬき。所を得。と云。

安置は道。軍防令。九軍器。在庫。皆造。棚。閣。安置。色別。異。所。和名抄。小棚。閣。多奈

唐令。云。諸軍器。在庫。皆造。棚。閣。安置。別。異。庫。豆波毛。見。閣。也。記。せり。

出納。は。伏器。を。出納。なり。軍防令。九。出。給。器。伏。付。領。之日。明。作文。抄。行。還。事。

畢。依。簿。勘。納。奉行軍行の日。其司。出。付。其司。受。領。の日。官人。連。署。兵部式

九。諸。儀。所。須。器。伏。者。衛。府。別。貯。庫。臨時。出。用。其。挂。甲。者。預。申。官。官。下。

符。兵。庫。府。別。分。付。事。畢。返。納。い。り。挂。甲。は。衛。府。の。庫。高。野。紀。小。天。平。神。護。元

年。十。月。壬。子。先。是。兵。庫。器。伏。者。中。務。監。物。與。本。司。相。對。出。納。至。是。諸。司。相。知。

出。納。あり。元。は。寮。官。監。物。のみ。なり。集。解。古。小。天。平。神。護。元。年。十。月。十。五。日。官。符。云

出。納。兵。庫。器。伏。事。右。被。大。納。言。從。二位。藤。原。朝。臣。永。手。宣。傳。奉。勅。出。納。兵。庫。事。可。

重。密。故。先。下。勅。内。印。施。已。訖。而。令。中。務。監。物。仍。承。前。例。唯。與。本。司。知。之。行。府。既。重。

檢。司。猶。輕。自。今。以。後。宜。令。諸。司。出。納。と。同。時。の。官。符。を。記。せ。り。諸。司。は。中。務。兵。部。主。計

此。事。は。大。藏。省。に。い。り。曝。涼。を。考。課。令。小。慎。於。曝。涼。明。於。出。納。為。兵。庫。之。最。註。小。曝。者

陽。乾。也。涼。者。風。涼。也。と。い。り。按。陽。乾。は。白。日。曝。涼。を。い。ふ。て。濕。物。は。日。不。暴。也。一

乾。物。を。涼。ふ。て。兵。庫。式。九。器。伏。應。須。曝。涼。者。預。移。兵。部。諸。司。兵。部。就。庫。

監。曝。十。日。内。令。了。曝。涼。隨。時。辦。置。異。所。と。い。り。諸。司。は。本。寮。より。移。文。を。遣。は。し。て。天。平。神。護。元。年。の。格。の。遺。ふ。

い。受。事。覆。奏。は。官。人。の。勅。旨。を。受。て。伏。器。を。出。付。領。の。事。を。受。け。は。此。寮。より。

覆。奏。出。し。附。き。い。ふ。覆。奏。の。義。は。大。官。衛。令。小。九。奉。勅。夜。開。諸。門。者。受。勅。人

宣。送。中。務。中。務。宣。送。衛。府。覆。奏。然。後。開。之。と。い。り。例。不。同。一。公。令。下。勅。旨。其。勅。處。

分。五。衛。及。兵。庫。者。覆。奏。註。小。雖。中。務。覆。奏。而。本。司。又。覆。奏。と。い。り。寮。の。本。司。は。後

一。公。令。の。兵。庫。式。九。出。納。雜。器。伏。者。皆。寮。官。隨。事。覆。奏。訖。與。諸。司。出。

収す、凡出充諸衛及中務省元日儀仗並待官符充行とあり常例は覆奏
せり官符到りて出附あり受事覆奏
臨時の處分なり

史集集解古記大同四

年三月十四日官符云加置諸司史生員事左兵庫二員右兵庫二員右新置
如件とあり中務式給時服小兵庫寮史生四人此式は左右雜工部は造兵司の
雜工て此寮に隸し此は造兵司を兵庫寮式小九雜工部二十人簡取戸内百
姓藝業勝衆者兵部省勘籍補之兵部式小兵庫寮工部二十人省隨其解
移申官勘籍補之其考帳者毎年送省といふ

内兵庫司

正一人掌准兵庫頭佑一人令史一人使部十人

掌准兵庫頭五字本註

直丁一人

内兵庫寮は御料の器仗を藏め非常の備に設けられふむ其器仗を掌司
あり後宮職員令小兵司掌供奉兵器東宮職員令小主兵器署掌
兵器儀仗之属と皆兵器を掌し御所非常の兵器とあり（准）内
内藏寮の内小同集解小為非常事内外二處設者式云此司為御料設也
いと同解古記大同三年正月廿五日詔小其内兵庫併左右兵庫と記せり准兵

庫頭は内兵庫正兵庫頭の掌し准儀仗兵器安置得所出納曝涼及受事覆
奏の同職を掌し御所の武器府庫小長官を正といふ兵庫寮掌し兵
庫頭を同庫頭を同疑ひあり本註を加てせり板
本掌准兵庫頭五字太字記を誤り餘司小例あり

右職員神祇官以下官省臺府寮職司主典以上の官人三百六十六員二官三十五員八省
五十一員有位の雜任二十五百十員内記六員監物十員主鈴四員主鑰十二員
主礼大員解部七十員判事十員巡察十員
士部十員物部七十員侍醫四員諸師八十員傳士四十五員の外主將主策各此餘雜色
二員省長四員價長四員典筆典履とて五員史生一百四十六員舍人二千零九十員〇三四

三千六百七十六員なり。伴部九百二十四員、諸掌二千員、使部一千五百十員、兵衛四百員、直丁三百四十員、守辰丁二十員、物部丁二十員、駈使丁二百七十六員の外、衛士駈使丁の定員は計へば諸掌は省けり。又在京の諸司官人雑色六千五百五十二員と見ゆれども、職員あり、あれは計へ誤るゝと有。今はその大略を見まらむ所の為なり。此後職員を加へ増へ給ひつゝ、是彼見ゆれども大同年中より省廢の格文として諸司を併せ停められ官人雑色も減少事あり。大倉人寮左右を鍛冶司造兵司、造工司、典鑄司、内蔵司、官奴司、鼓吹司、園池司、賦贖司、喪儀司、漆部司、主船司、縫部司、内礼司、内藥司、内掃部司、内兵庫司、管陶司、内漆司、主鷹司、散位寮、左右衛士府、主油司、とて寮府司を二十七官併せ罷られ。又新官員を置きしとあり。省寮より史生扶省掌史生扶省掌を加へられ、又新官員は時小隨ふ沿革の格條もくさく見ゆ。此新官は令文官職の餘を以て令外官といへば其管司も悉く載せ論ふべしと多し。是は別記に附録とせざる其書を見て志す。

職員令

新釋令義解

新釋令義解第九

井上賴國藏

勢州 祠官 園田守良 著

職員令

左京職右京職准此

管司一

大夫一人掌左京戶口名籍字養百姓謂字亦養也 糾察

所部貢舉孝義田宅雜徭良賤訴訟謂凡訴訟皆自下始故先由京

國而後至官省也 市廛度量倉廩租調兵士器仗謂案前令有兵士无

器伏今於此令兵士器伏並注即知非
兵士之器伏別有官器杖共諸國同
道橋過所關

遺雜物僧尼名籍事上亮一人大進一人少進一人

大属一人少属二人坊令十二人使部三十人直丁

二人

左京職ハ東京の政務を掌る司あり
宣改新之詔初修京師置畿内國司にあり
其より下宮處として宮號を負たり
異國の如く京師の號はふりし御代より始なり
波長柄豊崎と見るも漢風なり
都邑を建て宮室を営み給ふ事訖りて新

京遷幸まつ事なり
近江近江大津宮
天武御代ハ大和國飛鳥の地不定め給ふ
年十二月乙卯遷居藤原宮戊午百官拜朝とあり文武天皇大室元年新令施行

の目此京師すつて元明紀和銅二年十二月丁亥車駕幸平城宮なり
此後ハ聖武紀ハ紫香樂宮恭仁宮孝謙紀ハ平城京ハ五御代より桓武天
保良宮桓武紀ハ長岡宮ハ暫く坐つたも猶改めり
皇延暦十二年正月甲子造大納言ハ藤原朝臣等相山背國葛野郡宇太村十三年冬

十月辛酉車駕遷新京に見ゆ
此新京は今の都地なり
平安京といふ號此時始なりハ左京は藤原京の東

京あり皇城の左方
巨勢朝臣幸檀努
天武御代ハ大和國飛鳥の地不定め給ふ
官者名以爲尹官位准正四位下官にあり
改め官位を高く昇れ新制を立給ふものなり

西都尹ハ漢唐の制ハ京兆尹東都尹ハ此號も後ハ見之に
早も同年ハ傳ゆ
左京ハ皇城の左右を分て名を負ひハ東西ハ左右京と申

古籍不東の京西の京と記中、左京在京職式、京程南北一千七百五

十三丈東西一千五百八丈通計東、東西自朱雀大路中央至東極外畔七百

五十四丈右京と見られ、朱雀大路中央より東、西京の堺を分つ、とあり、亦、朱雀

は宮城門の南方大門より其通路をいくるあり、さて東京は其中央より東極まで七百五十四丈、いふ今の一千二百五十歩半あり、手一千七百五十三丈八十二百五十五歩ふ

横二百町三十三間餘といふ、右京も准、知、戸口名籍ハ左京堺内小住の課戸

不課戸も、雜戸の男女口名帳あり、不課戸の事は、戸令ハ九戸籍六年一造の制ハ

京國同、一、文德實錄天安二年十一月廿六日癸未、左京職言、毎年進、鍛冶

進と見られ、ハ此頃まで、雜戸の計帳を掌り、あつ、雜戸籍ハ、京職式ハ、戸籍帳料

戸令ハ其雜戸、後戸籍即更、寫各送本司といふ別籍ある、一、京職式ハ、戸籍帳料

小町席黃帛黃糸洗鹿革盛韓櫃、其紙筆墨並准、令、紙隨戸口數、輸三

張、紙一千張、充墨一百五十張、充筆一、唐、唐の制ハ、太宗諱世民といハ、氏字をいふ、そ

も、洛中は衆民の集會へる地、士農工商の多、ハ百姓といふ、難ハ、ハ京師

衆の義、ハ四方衆庶の、字ハ、養ハ撫て養ふといふ、字ハ、安撫、愛育あり、漢籍

競ハ聚る地、ハ、字ハ、養ハ撫て養ふといふ、字ハ、安撫、愛育あり、漢籍

詳察政刑得失、知百姓所患者、敦喻百姓、勸務農功、ハ此字、養ハ、ハ、

但、京洛ハ農功の務め、ハ、其工商の、糾察所部ハ京職の部内の所ハ非違を糾

産業を勸め、務め、ハ、諸國の制、ハ、糾察所部ハ京職の部内の所ハ非違を糾

一、檢察するあり、其部の堺内ハ限る、戸令ハ部内有不孝悌悖礼、ハ、

糾而繩、ハ、繩ハ正、ハ、京師ハ衆庶の聚る、貞孝孝義ハ才能の人孝子義婦

を貢、其行状を由、ハ、貢、ハ、貞孝孝義ハ才能の人孝子義婦

孝悌忠信清白異行發聞於鄉里者、舉而進之、ハ、孝義ハ、田宅ハ口分田

宅地あり、京洛毎戸男女小口分、ハ、給、田令ハ見えて、諸國の例ハ同、京職式ハ、

造授田口帳と見え、類聚國史、第一、ハ、天長六年六月辛亥、傳授京職絶戸田、ハ、

奸盜也、ハ、猶田令ハ、ハ、京職式ハ、ハ、京中ハ不聽、管水田、ハ、大小路邊及

閑地者、ハ、不論、貧富、量力播種、時、營作、並加、勸課、令、盡地利、宅ハ人宅、ハ、坊

間、ハ、私宅あり、營繕令ハ、ハ、私宅、皆不得、起、樓閣、臨視、人家、京職式ハ、ハ、大

間、ハ、私宅あり、營繕令ハ、ハ、私宅、皆不得、起、樓閣、臨視、人家、京職式ハ、ハ、大

路建門屋者三位以上及參議聽之雖身薨卒子孫居住之間亦聽自餘除非門
屋不在制限の制をこする 三位以上の制あるを卒とす 坊間の人宅は掃除のあと京
職式凡京路皆令當家毎月掃除彈正式不在宮外諸司並諸家掃除當路
とあり 當路は其戸の前路をいへり 雜徭は歲役の外雜事の課役あり賦役令凡令條之
外雜徭者毎人均使檢不得過六十日 當路令不役京内人夫註小以雜徭作
とありて京内は正役多雜徭のみの例あり 就職式小凡京戸課了 良賤訴訟
と所部の良賤訴訟とて公令小凡訴訟皆從下始終前人本司本属とありて
京職訴へ次第を経て刑部省に到る制あり 他國より京職の部内上刑部省に良
賤名籍の註考ふへ 市廛は市易の肆店あり東西市の条此職の物判を
もて載り 度量は雜令小凡用度量權官司皆給樣註小大藏省及諸國
司之類也 此職も様ありて所部の奸偽を糾察とす 私小度量を用ふるを禁め
其様此職不 倉廩は米穀を藏め貯ふ所なり 民部省倉廩米 京職式小凡穀倉
掌るへ の註を考へ

院勅旨所正倉守左右京兵士職別一人 守正倉六人あり 民部式小凡京職正稅義倉
穀者省典註計主稅共知出納義倉用度帳京職毎年三月進官即經省下
察す 凡穀倉院所納穀者云云 其匙二枚省以掌糶庫匙と有り糶は乾米
此は稅倉義倉糶倉と此職守固也 糶調は口分田より租を輸へ毎戸
調賦を准る 有田有租有戸 類聚國史 公文 延曆六年壬午五月癸亥左右
京職所掌調租等物包日非一或不動徵收多致未納或犯用其物遷替之司
貽累後人見 不動は不動穀といふなり 兵士は京職式小兵士四十人 凡宮城邊童
使立鋪兵士二十人為番守衛 鋪は今の凡番客入朝者進属史生各一人
率兵士六人禁衛館東門 右京禁衛南門准此 見 又云凡兵士以淺桃漆為當色不得
を守り夜行の時小混るへ 其御士雜亂とあるは衛府も穀倉院
目ハ衣色をもて驗とるを 番仗は京職の庫貯ふ兵器なり 諸國司も武器あり
るも皆同 註小前令凡室小兵士を記此令養養 今も兵士番仗と並ひ注せり
是もて兵士の番あり別官の番仗在て此職不貯ふ諸國と同例を知ると二令

論官仗と京職の私軍防令九兵士毎以弓一張云皆令自備不可闕少

といハ兵士は各我具を備ふ一京國同し日な云更なり 道橋の道は京洛の大

小路京中に當經令九津橋道路毎年起九月半當界修理十月便訖諸國の

も同京中京職式九京城邊朱雀路溝皆令雇夫掃除あり橋は續日

本後紀天長五年十二月丁卯大政官符今檢案内京中惣五百八十餘町橋果

三百七十餘所京職式九毎年出舉造橋料錢二百貫取其息利隨事

无用官人遷替依數付領と見え息錢も修理するあり管經令九京内大

者並木工寮修營とあり類聚國史一百七員觀十八年二月十日戊午京職

此二橋は京職の修營や掌る言返上出舉修理官舍道橋料貞觀錢六十貫職司以乘物買米二百斛納

其息利為彼料大政官處分依請とあり乘物は剩物過所は諸國行

路の文符あり俗に往來お下公式令云一閑道は捕亡令九得閑遺物者

皆送隨近官司在市得者送市司所得之物皆懸於門外云經一周無人認者

没官錄帳申官聽處分とあり左京界内の閑遺雜物も此職も送る一右京も閑

遺の義は上贖贖司下捕亡令云云あり僧尼名籍は在京の僧尼あり雜令九僧

尼京國官司毎六年造籍三通註下如外國人為京僧尼者京職造籍本國不

造也とあり外國の僧も在京の間此職小史生を置り付元明紀和銅五年

壬子二月己酉東西二京始置史生各二員あり和銅元年八月庚辰兵部省更加史

六員と記す元正紀靈龜三年七月己未加左右京職史生各四員日本後紀

大同元年八月庚辰左右京職加史生各六員と見え八員十二員なる小

後小省減せらる式部式小左右京職史生各十一人權一とあり正員拾人

一員職掌は類聚國史職官弘仁十年十一月己卯置左右京職

職掌每職二員と見式部式も同一各職掌二員あり坊令十二人は孝德

紀大化二年正月甲子詔九京每坊置長一人四坊置令一人と見え八左右

名坊名四十八ありて令十二員と定められ坊長四十八人京職式

坊長三十五人 條別四人祖一二條
條別は拾芥抄に八戸日行四行為町四
町日保四保日坊四坊日條京師總有
九條といへば按一行八戸も四面各八戸ありて町區の如く故に四行を町といふ町は
三十二戸あり其町四區を保た保は二百二十八戸され一坊五百十六戸を見れば坊
四の二千六十四戸町區の如きもの六十四所ありて一條の路を開けは是を條といふ
かきまは坊間小件佰ありて其水碁局の罰の如くある一然あれと古の制はいつ、
有けは類聚國史職官小延曆十七年四月公卿奏議按令條左右京每條置坊
一人督察所部身無俸秩す日本後紀天長五年十二月丁卯大政官符令檢
按内京中總五百八十餘町と見えたり拾芥抄の説ふは一條に六十四町和名坊小
坊別屋也 和名 區別の金屋を 坊名教業坊三條 豐射坊三條 永昌坊四條
永寧坊四條 宣風坊五條 宣義坊五條 涼風坊六條 光德坊六條 安衆坊七條
統財坊七條 崇仁坊八條 延喜坊八條 開業坊九條 陶化坊九條 東西京の
坊名各七つ見えて一二条の坊名を載せし傳はらざるなり 漢風の坊號を按ふ旧
名の遺せらるゝのみむ

東市司

西市司
准此

正一人掌財貨交易器物真偽度量輕重賣買估價

禁察非違事

佐一人令史一人價長五人物部二

十人使部十人直丁一人

東市司は東京市司と云る如く其市塵を糾察の事を掌り孝德紀大化二
年三月甲子制罷市司調賦給與田地と云ふ事見ゆ古より調徭は免さる制不
り 賦役令に價長免雜徭とあり市司 財貨交易は米粟田宅を財と錢鉄
は見ゆ八位上の中よりあるむ 財貨交易は米粟田宅を財と錢鉄
布帛の類を貨といふなり 礼記喪大記篇注に財穀也謂米由穀出故言財也
金銀布帛等物皆曰貨唐六典大府の条に錢

帛之屬曰貨金銀之屬曰宝と記せり按不財は衆庶資用の物貨は交易は雜物
變化流行の物人小售り興ふとして貨財連ねいと精しく上より如くふむ
を互に相易ふる義あり云々元明紀和銅七年九月甲辰制自今以後不得擇

錢若有實知官錢輒嫌者勅使杖一百其濫錢者主客相對破之送市司元

正紀養老六年二月戊戌詔曰市頭交易元來定價比日以後多不知法云其用二

百錢當銀一兩銀仍買物貴賤價錢多少隨時平章永為恒式京職式

凡錢文以一字明皆令通用若有擇弃者隨狀科責以上錢をもて交易の制あり布帛郡

稻交易の制は賦役令云云一して市厘は集解に關市令云凡市每肆立標唐

云市肆皆立標築土為候東市司職式凡每月十五日以前集東市十

六日以後集西市云云同式市厘五十一厘東市司職式凡每月十五日以前集東市十

十月庚辰西市司言依永和二年二月符旨錦綾絹調布絲綿紵漆物縫衣麻

針櫛漆草帶幡油土器絹冠牛屨等類興販於西市而東市司論曰檢永和

七年四月符依弘仁十一年四月式件等色物西市共可興販不可更度今百

姓遷還於東交易件物仍印漢既空公事關急者去永和二年彼此中折

施行既訖而永和七年四月班式之日遺漏不改勅宜依前各不可據式と

あり東市司式云凡絹雜漆物市厘の義は下考課令云云器物真偽

器用の具布帛雜物あり關市令凡行濫之物交易者沒官短挾不知

法者還主偽物沒官唐雜律造器用之物絹布之屬有行

箭鏃用柔鐵者為濫綾絹帛又尺不充常制唐典諸市署掌以為濫之物交易者沒官度量輕重は度量

の本様より穀帛の類輕重あり尺寸の度より升合を量るより多寡

輕重は估價の中估より加減するをいふ賣買估價は上太藏省に

いへる如俗に賣買の直錢相場あり類して市司の價物を定むるをいふ禁察

非違は市肆の非法違令を禁め奸詐を明察するあり考課令市厘不擾奸慝不行為

市司之最見奸偽財貨器物度量雜令凡皇親及五位以上不得遣帳内資

人及家人奴婢等定市肆興販關市令凡在市興販男女別座每肆立標題其

唐百官志小諸
市署掌財貨交
易度量器物
辨其真偽輕重
此文より輕重の
義明かり

市町四面に茶土の
牆垣を築き置り
1.5.ふむ

行名京職式凡京中衛士仕丁等坊不得商賈但酒食不在此例東市式凡六
衛府舍人等不得帶釵入市凡市皆每屋立榜題號各依其屋隨色交
関不得彼此就便違越唐六典諸市署不綴於市偽濫の物を多く記す者記價長ハ内藏寮價
長掌平物價大藏省の價長も同職雜物の價平均を定むるを掌する上の余も賣
買估價何れ此價長の掌する市司の惣判する一関市令市司准貨物時價為三等十日為
一簿在市案記季別各申本司三等は上中の價をいふ凡官典私文関以物為價者准中估價
と見私ハ市肆の物官物と交易をふく價長は市人交易を定むる其價籍を寄し申送東市式凡
毎月勘造價帳三通送職職相署即職印印之一通進官一通留職通付司職ハ京職司此
簿帳にて内藏大藏の價長も估價を定むるなり民部省估價註云當賣買時知估價法
又市人の賦帳も東市式凡市人籍帳毎年造進なり此ハ市賦の帳也東市司式凡居准
司廻四面淫塗道橋及當堀河等造料其用帳年終申送となり淫塗は壁をいふ物部は罪人決罰の職は上因獄司云々如
唐六典云兩京諸市署有果毅巡視平貨物為三等之直東市司式凡商賈之輩沽價
有衛士五十人以察非常之事此物部に似たり

之外若有妄增物直者不論陰贖登時見見是ハ見ふ隨ひて決罰決罰即時凡賣買不和較固者

市司進捉勘當較固計ふ奸凡市裏有凌奪之輩者奏任以上准狀散禁請裁判任以

下租禁隨犯決罰凌奪は威力にて奪取をいふ奏任以凡市町准市裏本司加勘糾隨

犯科責と見えて非違の徒を決罰のめ此物部を置き此司史生や置多

元明紀和銅五年壬十二月己酉東西二京始置史生各二員二京ハ二市の後まゝ二員が加へ

凡市司史生各二員日本後紀見

凡市司史生各二員京職式市司執鑰二人あり詳ハ後

凡市司史生各二員此司此庫藏ハ市司問鑰を考ふ

凡市司史生各二員此司此庫藏ハ市司問鑰を考ふ

攝津職帶津國

大夫一人掌祠社

謂祠者祭百神也社者檢校諸社也凡稱祠社者皆准此例也戸

口簿帳字養百姓勸課農桑糾察所部貢奉孝義田

宅良賤訴訟市厘度量輕重倉廩租調雜徭兵士器

伏道橋津濟過所上下公使郵驛傳馬關遺雜物檢

校舟具及寺僧尼名籍事上亮一人大進一人少進

二人大属一人少属二人史生三人使部三十人直

丁二人

攝津職は國の釐務を兼て津濟の所を掌るは其名を負ふる攝官の例は選叙令

公式令にあり此職は本註に帶津國を加ふるは津濟のみならず國を帶るを曉せる

文から一軍防令に防人至津之間皆令國司親自部領と津のみ云は此國津濟の地

をよりいへり津はしも多きを其を負ふ故に舊式に蕃客來朝從海路來朝攝津國遣迎船將到

難波津之日云々と大宰府も濟る要地なれ津職を定められあはて此地は孝德御代に

始て京師と定められ京職大夫を置きたる藤原の都に遷りて旧都をてり猶職名

を殘志津職を撰め給ふあり諸國の例いと殊あり唐の長安城を東都と洛陽

を西都と定むる制をかへては西都といふべき

勢あり宮室府庫も旧のものに残れて天武紀朱雀元年正月乙卯難波大藏省失火宮室

悉焚唯兵庫寮不焚と見え此時に宮室は焼くは猶旧宮の存るを聖武紀に天

平十六年經營難波大宮將遷焉既頃民所欲自恭仁鄉

復徙平城而難波工役自是遂竣といふ事ありかくて攝津職と職號ありは京職に准ふ制ありけむ公式令集解

職為京官故公文可捺本司印不可捺内印又下津國之諸郡遂々後より桓武御代に

公文可捺職印不同諸國之例也此職の公文を論ぶと見え桓武御代に

國号を改めたり孝德御代より八類聚三代格に延暦十三年三月丁亥大政官符に

御代に經る後より類聚三代格に延暦十三年三月丁亥大政官符に

孝經紀大化元年七月
庚辰蘇我石川麻呂大臣
奏曰先以祭鎮神祇
然後定政事

應停攝津職為國司事右被在大臣宣傳奉勅難波大宮既停宜改職名為國其二
季祿及月料並從停上類聚國史日本京官小准春秋季祿每月食料給ふ
事と始て停めれ諸國の例も定めらるる 國司も改め給ふぬ以前の題宗紀も天皇隨

億計王到攝津國と記せらるる後の追書なる日本紀畧も天長二年四月遷攝津國治
於豐嶋郡家以南地一義和十一年拾月國司奏依去天長二年六月勅旨欲定河邊郡以
為國治然以邦弊民不堪役故請以
鴻臚館為國治とあり鴻臚の事は云々 大夫は天武紀六年十月内大錦下丹比
公麻呂為攝津職大夫と見ゆ

神社は祭祀の神社あり 祠は垂仁紀小祠于五十鈴
河上の祠を伊波比万豆苗
とあり万豆苗の祠を
訓めは祭祀の義は志す 職掌の始は神祭と記せるは神祇官諸官の上も載るる同
神祇をまつ祠とけ祭る後
國政をきく皇國の古制あり 註は祠は多くの神祇を祭るなり 百々其數社に諸
社を國司の檢校をいふ神祇令小九神戶調庸及田租者並元造神宮及供神調度皆
國司檢校申送所司とある此意あり 所司は神祇をて祠社と稱するは皆此例と云は

餘は祠社とあるを曉せり 大宰府小祭祠大國余 勸課農桑は農作を勸
め殖業を課せり戸令小九國守母年一巡屬郡勸務農功田令小九課桑漆上

戸桑三百根漆二百根以上云々とあり勸め課せて蕃殖せむは專務あり元正紀靈
龜元年五月辛巳朔勅諸國朝集使曰撫導百姓勸課農桑心存字育能救飢
寒是國郡之善政也と記せり 津濟は難波津其餘津濟の地あり 津は船の泊
舟として渡る口をいふ延喜雜式小九難波津頭海中立零漂若有旧標朽折者
根氷放去とあり海中船路の標を即ち水脉つ串といふものあり
雜令小九要路津濟不堪涉渡之處皆置船運渡依至津前後為次と

あり 津濟の義は上民部省 上下公使大宰府より京より京
より大宰府より下る取使あり 玄蕃式小九蕃客往還有 軍防令上防人到津國
國司部領送大宰府とある部領使も公使あり桓武紀小延曆八年十一月壬午停
攝津職勘過公私之使とあり 勘過は公使の過所をて公使の經歷の日供給の
事とあり 郵驛令不見あり 兵部省 兵馬司 驛は驛舎あり 傳馬は其國郡の
馬をいふ 厩牧令 檢校舟具は津濟の舟具あり 舟具の事は上文より出入
の旅船も檢校を兼るるなり 集解別記小船守戸百個 有津國と見る主船司と云々あり 寺僧尼名籍ハ

津國の諸寺僧尼の簿帳あり自餘の事は京職の釋ふへりかくて此國小鳴臚
館あり蕃客來朝の欽明紀二十二年小是歲新羅遣奴氏大舍獻前調賦於難
波大郡次序諸蕃掌客額田部連葛城直等使列于百濟之下引導大舍怒還
不入館舍乘船到穴門於是脩治穴門館見穴門は長門國より此國に關津の地にて
主殿式は長門國官舒明紀二年是歲改脩理難波大郡及三韓館推古紀十六年四
月小大唐使人斐世清下客士人到於筑紫云云為唐客更造新館於難波高麗
館之上六月内辰唐客等泊于難波津是日以飾船迎客等于江口安置新館と云へ
り大郡と津職館舍の在所あるへ今の西成郡本庄村小旧趾ありといふ三韓館は東
成郡安樂寺坂上といひ傳へられ此ありをむ江口は淀川のほとりあり名高き地名なり
亮以下の官人延暦十三年小國号を改めり後は入據目を改め置りむむと云へ
集解別記は太炊戸廿五戸津國客館食為品部免雜信とあり蕃客食料を供給のたより

大宰府

帶筑
前國

主神一人掌諸祭祠事

帥一人掌下祠社戸口簿帳字養シ百姓勸課農桑シ糾察シ

所部貢奉孝義田宅良賤訴訟租調倉廩徭役兵士

器仗郵驛傳馬烽候城牧過所公私馬牛關遺雜物

及寺僧尼名籍蕃客歸化謂遠方之人饗讌事上

大貳一人掌同帥小貳二人掌同大貳

大監二人掌^ル糾判^シ府内^ヲ審署^シ文案^ヲ勾^ハ替失^ヲ察^ス非違^ヲ巡^ニ謂^フ

察^ス所部^ヲ非違^ヲ其諸國判^ス少監二人掌^ル同大監^ニ

大典二人掌^ル受事^{ケテ}上抄^{セシ}勘署^シ文案^ヲ檢^ヘ出^シ替失^ヲ讀^ミ申^ス公

文少典二人掌^ル同大典^ニ

大判事一人掌^ル案覆犯狀^ヲ謂^フ案覆^ス管國^ノ所^ニ申^ス犯狀^也斷^リ定^メ刑名^ヲ判^ス

諸^ノ爭訟^ヲ少判事一人掌^ル同大判事^ニ

大令史一人掌^ル抄寫判文^ヲ少令史一人掌^ル同大令史^ニ

大工一人掌^ル城隍舟楫戎器^ヲ諸^ノ營作^ヲ少工二人掌^ル同^ニ

大工博士一人掌^ル教授^シ經業^ヲ謂^フ教授^ス管國^ノ學生^其醫師^不稱^セ教者^ト文略^ヲ

課試學生^也陰陽師一人掌^ル占筮^シ相地^ヲ醫師二

人掌^ル診候療病^ヲ竿師一人掌^ル勘計物數^ヲ

太宰府は和名抄子於保美古宅知乃司とめり如く天皇の大命を執持つ隆務の司
ふれ其職尤も重一方葉集世小天皇乃等保能朝廷等之良奴日筑紫國波安多麻

天智紀六年十月乙丑
筑紫都督府
同日記ノ上文ニ熊津
都督府ト訓メリ

太宰府筑前口三笠

毛流於佐倍乃城曾等聞食とよみて西邊の重鎮とて外寇防禦の地あり太宰は周
職の掌建國之大典以佐王治
邦國とある義も佐王政の官字なり敏達紀六年大別王及大黒吉士宰百濟注曰凡奉

使三韓者稱之曰宰蓋古之典乎猶今言使也とある宰も勅命を奉持つ義あきけ大

宰は是より出る假名日本紀小日本府旧作倭宰とあり或説に神功皇后の三韓國を

任那任那府蓋自是始と見え雄略紀に日本府とへとも同地ある一欽明紀二十三年新羅

の任那官家を滅せり廢れて同御代に再興せんと思食せしむる果給て韓國朝貢

旧例の如く其府をまつ筑前國は建ちて其後崇峻推古の御代より有りと

太宰府は任那府の遺制といふはまづ考ふに此筑前國は古より韓國より往來の海路ふ

れいしと津鎮を置きと撰津長門の例にて任那府をうつされはあはれ魏志倭

傳より自女王國以西特置一大率檢察諸國畏懼之常治伊都國於國中有知刺史と記せり

和名抄小筑前國郡名云治土を以止と訓るも伊都の古は彼國の傳聞の計り有るなりと筑前國小大率持の官を置きと知に此府を古はいひ人知

かんれと推古紀十七年夏四月庚子筑紫太宰府を始て見えり或説に推古紀に始

て見ゆる故の推量り

いふ考ふ皇極紀二年夏四月小筑紫馳驛奏云天智紀六年十月乙丑筑紫都

督府より七年七月以栗前王拜筑紫率と此府の事を記せり同御代小吉備國より大

三月吉備大宰石川王とあり文武紀小筑紫物領周防惣領とい職名も見ふ同義なり重鎮なるは天武紀元年筑紫大宰率小

筑紫國者元成邊賊之難也其峻城深隍臨海守者豈為内賊耶光仁紀宝龜十

一年七月戊子勅曰筑紫大宰僻居西海諸蕃朝貢舟楫相望由是簡練士馬精

銳甲兵以示威武以備非常と云る文德實錄は勅曰太宰府者西極之大壤中國之領袖

自古干今以為重鎮三代實錄小勅曰鎮西者然ありと聖武紀天平十

四年正月辛亥廢太宰府遣右大辨從四位下紀朝臣飯麻呂等四人以廢府官物付

筑前國司に見えて始て此府を罷て筑前國を置はりといふ太宰府の號は猶傳へ

新羅使沙湊金欽茂等一百八十七人來朝庚辰詔令右大辨

紀朝臣飯麻呂等卿金欽茂等於太宰と記する其實は筑前國館あり同七月丁酉制大

隅薩摩壹岐對馬多祿等國官人祿者令筑前國司以廢府物給其三嶋擬郡司

並成選人等身留當嶋名附筑前國申上と此三嶋は太宰府の旧例を以て御制

めりといふ猶便宜いふさうといふ同十五年十一月辛卯始置筑紫鎮西府と在て

官員の定め有つといふ官員は將軍副將軍判官主典の
同十七年六月辛卯復太宰府八月己丑給太宰府管内諸司印三面と記せり旧号を廢稱へり和名抄筑前國の条

同紀當作天武紀
文武紀周防太宰
吉備惣領周防惣領
筑紫物領周防惣領
天智紀元年
栗前王の對

云大宰府並國府在御笠郡府下三面皆海とありて地勢を知り記府下三面皆海とありて地勢を知り府下三面皆海とありて地勢を知り

是此府其國の政務を負持の義を兼て如上文小撰津職上八國司を置

目より一は上に見るべき代類聚三代格小大同三年五月大政官謹奏省大宰府

監典各三員置筑前國司守員内員丞一員大省各一員按令條府帶筑前

自爾以降或別或隸至延曆十六年遂廢國隸云請望更分置官人以為別當專

一其心以濟國務然則帶國之名不乖令條云永前府帶之時或下官符以

定別當或府司相量而置其人同僚之官兼預國務勘員雜怠不同此國望

請有大同元年所增監典以充補國司度令所守有別各清繁劇と記せるを

此時國司を定めけり府國と別を置けり然るに其治所は同地あり

主神は此府祭祀の職あり主神は於保美古止毛知乃加美司と云一和名抄主神司

より一古本不加半豆加佐以豆岐乃美衣乃加美官とある者宮の主神は此訓より

よて三職を兼てゐる古語拾遺云凡奉幣諸神者中臣齊部共預其事而今

延喜雜式凡大宰府應奏神事者帥獨署若帥有故者少貳以上一人署奏と

いへ此主神の神事を高野紀に神護景雲三年大宰主神習宜阿曾麻呂といふ

名見習宜は姓氏録に中臣諸祭司ハ神社を祭るをいふ上撰津職に祠者祭

万神也といへ祭祠は自同義なりハ祀の誤りありぬかと思へ諸は此府の百神なり一國

の祝部長といふ云一九國三島帥は主帥の義あり凡稱主長者為孝德紀大化

五年小拜蘇我日向臣於筑紫大宰帥天智紀八年春正月戊子蘇我赤兄臣拜

筑紫率同十年夏六月是月以栗隈王為筑紫率同紀七年秋七月以栗前率帥同

意率也といふ字書帥率也といふ負外帥を置けり孝德紀云大化五年拜日向臣於筑紫大

宰帥世人相謂之曰是隱流乎とあり此人の語言をして同族山田麻呂を殺し給へるを追

り此制より後左遷の人の拜せり孝謙紀天平宝字元年秋七月

戊午勅曰右大臣豐成者事君不忠云宜停右大臣任左降大宰員外帥と始て

見え桓武紀天應元年六月癸卯降大宰帥從三位藤原朝臣演成為員外

帥備仗之員限以三人仍勅云云貶其任補員外帥宜莫預釐務但公
解者賜帥三分之一府中雜務一事今毛人等行之員外官之制見元
此今毛人は府の大貳なり帥員外帥共補任ふき一員の制未定め
故より正員なきは員外を定むれば員外を置るれば正員なり大
貳の代り行ふは此より明なり此員外帥は後昌泰四年三月
廿九日左大臣菅原朝臣道真安和二年三月二十六日左大臣源朝臣高明長徳
二年四月二十四日内大臣藤原朝臣伊周みふ此官は左降せしむる古の
隠流の類なり堀河院御代は大納言源朝臣經信中納言大江朝臣匡房も權帥
とありて遙授の官なり筑前國の下官人の交替し諸國も果ふは撰叙令も秩限
もさりと見えしは上との異なり官人の交替し諸國も果ふは撰叙令も秩限
云々も慶雲年中の四考も定められしは比例は撰叙令も宝龜十年八月
大政官奏ふ大宰府云云已所執掌殊異諸道而官人父母交替限以四載送故
迎新相望於道府國困弊職是之由加有包厨之費守例充之蕃客之設或從
關焉以事商量甚不穩便望請停交替料且官人歷任増以為五年といふ事
も見えしなり神社は上云り戸口簿帳は筑前國の民戸より管國の戸帳
も何ふへし惣判の故なり倉廩は此府の貯ふ雜物の倉米廩より民部式も

凡大宰府充仕丁者藏司二人税倉二人とあり 徭役は正丁の歳役國中の

番役あり 賦役令 兵士器仗鼓吹の六字板本も脱し今補へり 集解も

目と必き攝津職の兵士器仗大國の兵士器仗鼓吹を載れり此府もふか
有べき外賦を防ぐ鎮所も非常の備へり 主税式も諸國正税公廩の条も府
前豐後六國合十萬九千八百七十七束隨日數有増減と記して衛卒の員は見え

民部式も凡大宰府鼓吹丁筑前肥後各七十二人筑後肥前各五十四人豊前
豊後各三十六人並免其徭役 弩師を置るは廢帝紀天平宝字六年四月辛未始

置大宰弩師と見ゆ 此外昌泰二年四月省肥後國史生一員置弩師一員類聚三
代格も延暦十六年永停弩師然其不虞可備故弘仁五年五月省史生一

員置弩師寛平六年九月省史生一員以加弩師其府解云若有病故誰
補其闕云云とあるも二員も定まれり 猶軍防令 其秩限も同格も元慶二年二月

定秩限日弩師所起輒在邊要陸奥出羽大宰府及壹岐對馬皆五年為
限とあり 烽候ハ西邊上烽燧を置て候望の職を設け外國の寇賊も備ふ

是見平三箇條 善相公行
一清侍以殿人補諸國檢
非遣使及弩師事
縁辺諸國各置弩師者
冠職之末紀也臣伏見本朝
戎器弩師も神其為用也短
逐擊長於守禦古語相伝
云々弩師功也奇巧妙思
別所製作也故大唐雖有
弩名曾不知此器之効利也

對馬壹岐多嶺ふとの邊地小烽望を置く此府惣判を此府より管國處々の烽候あり

有、天智紀三年乙未歲於對馬筑紫國等置烽典防と始て烽の事見之

軍防令凡烽晝夜分時候望を見之猶軍防令城牧は城堡と牛馬

の牧あり此事は軍防令廢後令より其条を見る公私馬牛は官馬と民間馬牛より上兵馬司公註小私馬牛の註小

公者傳馬及公解馬牛也私者凡非常畜而有民間者是也其征行大事公私

共給為其差發是故兼知と有り此府も管國の公私馬牛を兼知は同制あり

光仁紀寶龜十一年七月戊子勅曰筑紫太宰僻居西海諸蕃朝貢舟楫相望

由是簡士馬精銳以示威武以備非常といふ考ふ兵部式小諸國馬諸牧

馬五六歲牛四五歲毎年云其西海道諸國送太宰府但帳進省馬牛牧匹

は兵馬の本省よりあり凡肥後國二重牧馬若有超群者進上餘充太宰兵馬及當

國他國取傳馬とある皆官馬と云進上は京師より同式凡太宰府定額兵

馬二十疋之中十疋牧馬十疋並分置鴻臚館備急速之儲と見也鴻臚は蕃客の館あり

蕃客歸化は異國の人の皇化を慕ひ來り附といふ客は遠國より來り客礼の處分を

つる戸令小化外人歸化者所在國郡給衣糧具狀奏飛驒申奏凡化外奴

婢自來投國者悉放為良註小教化之所不被是為化外也投者歸也といひ

註小遠方の人の欵化して内國小歸來ると云内は皇國の内なり皇國を内と云外夷小對り宰

府のみより諸國を廣くいひ此文は歸化と云宰府を專らふあり欵は誠小歸服をいふ冠賊小あり

ぬ義を含めり魏志文帝紀小西域外夷並欵塞内附注小欵叩也皆叩塞門來而

服從也漢書注小凡納欵欵開欵門義同とあり字書小欵俗作

と見ゆ欵誤也郷食讌は外蕃貢客を郷食食讌飲するといふ上玄蕃寮小讌郷食送

迎といひ其条考天武紀十年十二月甲戌小錦下阿辺臣子首遣筑紫郷食新羅客

忠平十一年八月甲子郷食高麗客於筑紫天武紀朱鳥元年四月壬午為饗新羅客

等運川原寺伎樂於筑紫高野紀寶龜元年三月丁卯初問新羅使來由之日云

仰太宰府安置郷食給ふと見えて宴樂を給蕃客小郷食を給ふをいへり廢帝紀天平

月乙卯勅唐人沈維岳等者府依先例及字は別小其職掌あるをいふ此府の檢校

安置供給といふは歸化の人まで異ふと云

二六

をて記せりもて令文及字を隔てゐる

大小貳は帥の副官なり和名抄小長官大

宰府曰帥次官大宰府曰貳有大とあり

貳は周礼春官小為大宰之貳貳注貳副也佐也唐の尚書令一人

左右僕射各二人為令之貳貳とあり

故帥小代り府務を去る例あり桓武紀天

應元年藤原朝臣履成大宰員外帥左降の条

云勅大貳正四位上佐伯宿祢今毛人云府中雜務事

以上今毛人行きあり

全文は帥の条より職原抄は有權帥則不任大貳任大貳則

人知府務故任權帥時不任大貳とあるは後制なり

古は然り帥と權帥とは二人並に任せし權帥は多く左遷の人にて府務を知らず

諸官の例權守ありても次官は置る制なり其權守は

授の官にて其司務を行ふ事なき同准考ふて

小貳家譜を見れば其先武藤氏名頼兼任少貳而子孫世襲職位因更

小貳為氏其孫資頼事鎌倉頼朝從伐奥州有功為筑後守五世孫貞經建武中

黨足利尊氏とに事を記せり

大監は府の判官と諸司判官同職なり故再記せり京

官小異なる疑ある故おもむ神祇官大佐本註は餘判官佳此と云

其条小大祐一人署文案勾替失知上畫工司

宿直と同一職を知り正の条より如く察非違とあるは別當なり

府内管國を巡察て非違糾彈の職を兼り府内の彈正巡察大國守条は太極察非違と同制

桓武紀延暦五年六月乙未朔初撫育百姓

京官の外判官は府内糾判の事を主税式小凡大宰巡行部内者帥兼仗十人

貳六人監三人史生一人といひ此巡行は戸令九國守毎年一巡行属郡觀風俗

は此餘の巡行を筑前國務を此府に帶り故なり或説小大監筑前九國可巡

察裁義解不分す其大宰府内不可巡察義解稱所部准檢知耳と註小

巡察部非違を疑ひて府内小座て非違を察せきふあり大少典は四員ふ

巡行の日察をき彈正臺の職なり如く諸國判官も此義小同

を日本紀畧小大同元年五月己丑増加大宰大少監大少典各一員とあり

此後大同三置筑前國司乃除所加員以補其官類聚三代格小大同三年五月大政官謹奏

云省大宰府監典各二員置筑前國守小大少目各一員とあり増加へり大少

監典をて四員を停めり大典は太王典と云如く記事官は佐官の職持統紀五年正月

丙戌詔曰直廣肆筑紫史益拜大宰府典以來於今二十九年矣以清白忠誠不

敢怠惰と記せり大判事は上判事の条は按覆鞫狀断定刑名判諸爭訟

とある小同職なり此府管内の申を犯状を按覆あり職掌を委しく奉るは令文小

省司府國別小同職を精く載せしは常例なる事上文より令史の職抄

寫判文も上判部の条大属小掌抄寫判文とある小同判事の令史別掌此判事は

判事の条

桓武紀延暦五年六月乙未朔初撫育百姓

主税式小凡大宰巡行部内者帥兼仗十人

貳六人監三人史生一人といひ此巡行は戸令九國守毎年一巡行属郡觀風俗

は此餘の巡行を筑前國務を此府に帶り故なり或説小大監筑前九國可巡

察裁義解不分す其大宰府内不可巡察義解稱所部准檢知耳と註小

巡察部非違を疑ひて府内小座て非違を察せきふあり大少典は四員ふ

巡行の日察をき彈正臺の職なり如く諸國判官も此義小同

を日本紀畧小大同元年五月己丑増加大宰大少監大少典各一員とあり

此後大同三置筑前國司乃除所加員以補其官類聚三代格小大同三年五月大政官謹奏

云省大宰府監典各二員置筑前國守小大少目各一員とあり増加へり大少

監典をて四員を停めり大典は太王典と云如く記事官は佐官の職持統紀五年正月

丙戌詔曰直廣肆筑紫史益拜大宰府典以來於今二十九年矣以清白忠誠不

敢怠惰と記せり大判事は上判事の条は按覆鞫狀断定刑名判諸爭訟

とある小同職なり此府管内の申を犯状を按覆あり職掌を委しく奉るは令文小

省司府國別小同職を精く載せしは常例なる事上文より令史の職抄

寫判文も上判部の条大属小掌抄寫判文とある小同判事の令史別掌此判事は

判事の条

府内の司として令史を置けり此後日本後紀天長二年五月戊辰官符云定太宰府
明注博士官位事右得彼府解備去延暦八年始置伴官而未定官位謹請官裁云云
宜為從七位下官なり官位令小大宰大判事從六位下階少判事正七位上民部式小
明法博士仕丁六人見也判事の男見之ぬ此博士大少工は匠司とて工匠を率
ひ管作の職なり民部式小匠師一人修理器仗城隍は軍防令凡縁東
辺西辺諸郡云其城堡崩頽者役當處居戸隨開修理す凡城隍崩頽者役
兵士修理とては縁治る此職は新官を掌し陷は城下の坑池なり按小隍は役夫
工は木工を構作するなり元の深淺廣狹を檢知の事なり後小大工を以て見
えは主様式公解處分の条小主城陰陽師云民部式小大宰府主城主貢の城官の工を別
小置けり詳かたし舟楫は船舶機校なり船舶は保布祿機校官儀令小凡官船行用若
堪修理須造替者預料人功調度申大政官はる代廢帝紀小天平宝字三年二月庚
寅大宰府言據警固式於博多天津及壹岐對馬等要害之處可置船一百隻以
上以備不虞而今無船可用交關機要勅曰船者宜給公糧以雜徭造と見也

此項は雜徭云て船を作らむる事一延喜雜式小凡大宰貢綿穀者擇買勝載二
百五十石以上三百石以下者不著絶進上便即令習用桹其用度充正税とあり此船
へは大少工の管作なりかき貢献の此職は管作とて修理は主船の掌事なり戎器
物として官船と交易の制なり詳かたしは兵器なり此府の料を作弓箭前梓弩孝謙紀天平勝宝五年七月甲申西海道巡
察使紀朝臣牛養等言戎器之設諸國不同今西海諸國不造年料器仗既已
要當備不虞於是仰筑前筑後豐後等國造備甲刀弓箭各有數每年送其楯於
大宰府筑前筑後肥前肥後豐前豐後日向等國送大宰府民部式小凡大宰
奪使進之筑前筑後肥前肥後豐前豐後日向等國送大宰府送具其楯仗者色別一箇附朝
府官勘校貯納府庫具錄色目附朝集使申送と委く見ゆ府云匠司一人修理器仗所一人を記府料の兵器を修諸管作は府内の
館舎倉廩の類なり民部式小凡大宰附云其修理府中館舎料稻四万束毎年
出奉六國取其息利充用若利滿一万束者停奉とあり六國を肥豊博士
一人は明經博士なり經業課試上大学寮博士の条云々如高野紀神護景雲三年十月

佑一人掌同正令史一人

主船一人掌修理舟楫謂大工職掌云舟楫此即所新造者故此司唯掌修理也

主厨一人掌醢醢齊謂醢者醋也齋者凡醬所和也即令調和醬醋蒜薑之類是也

殖醬豉鮭謂雜乾魚也等上史生二十人

凡防人欲至在官司預為部分防司也

防人司を根本防人と記して司字脱り今補集解より防人と云り考謙紀天平宝亨元年八月帝勅防人司司軍防令所在官司註防人司也とある據り或防人は防司の誤れり考課令最條防司之最とある此司は隼人司と同明証とてよくいふ言ふと此防司は史略より防令防のみ云か

と云り按ふ府の下管一司の三字脱り知かく篇目小職員令八十條と

は八十條なりか身は何れを語り後此司を廢り云々詳か

小貞觀十五年十二月太宰府奏言去貞觀十五年新羅竊窺我邊掠奪貢物自是運田曹置鴻臚發後因分番成又置統領選士以備警言云と何るを按ふ

防守の兵ありと外賊の西辺をうかへ既此司の能る故云と考ふ

防人は西辺の國を成る防禦の人あり書紀小美佐岐毛利と訓は島崎々

を成るなりと或説は佐岐の邊り止孝德紀大化二年正月甲子詔初置関塞防人始て見ゆと天智紀三年小於對馬嶋壹岐嶋筑紫國等置防與烽

と云り西辺小鎮成を置る始と云ふ按天智紀元年小唐人新羅人の高麗申云はは太將軍大錦中阿曇比羅夫連等小船帥一百七十艘をて救けめ給ひ同二年八月己酉日本諸將と大唐の軍と戦ひ小皇軍いゝやうに最平多々亡ひ百濟の國も滅び大唐新羅の勢ありか三年小唐將軍の使人を遣け皇國の消息を窺けめつから外寇の来る計りかくて是歲田辺小烽候成兵を置き筑紫小水城を作り給ふ軍防令凡兵士向京者名衛士守辺者名防人あり此餘は非常の變に備給ふ軍防令凡兵士向京者名衛士守辺者名防人あり

魚鳥料理の司より府の大膳職 和名抄小厨 和名久 庖屋也庖料理魚鳥者謂之庖丁

俗云倉厨也俗小大戸棚と云るに知る食料を貯へる處の名なりは貢進の御贄蕃客郷

料を專當せり大宰府より例年貢獻の上 本府の及御食膳といふは此司を檢知する

る一後小比主厨を停めし一年月詳類聚三代格小承和七年九月廿二日

大政官符云今得大宰府解俣自得主厨以来例貢御贄並諸供具事觸類多闕

望請置立厨云右制令之日肇置主厨所職掌最在蕃客加以供給之儲不

闕之と云る其職志を以て民部式大宰府主厨見之大宰府厨戸三百九

十六戸は膳部食物菜蔬を進る戸人なり其戸は悉く知る事あり御

供戸小同又同式小九大宰府蕃客儲料米三千八百四十石若經年致損便充

公用廻旧收新充事とあり此文より主厨主厨の二司は蕃客を掌計は此府の

別司して大膳職の主醬主菓餅の例は同一なり

醋は醋漬肉なり字書醋虚敷及醋別名とあり醋の醋と記す醋といふは醋のみあり肉漬は

細切の物にて肉より菜より將西小交合するなり即ち蒜薑を將醋調和あり周礼注

將西所和切和名抄小齋即替反阿持薑蒜以酢和之食經曰搗蒜とあり醋肉

菹菹菜也醃豆菜の三種は上大膳職云なり鮭は魚菜を合せる名なり字書

酒肴の肴とあり註は雜乾魚といふは據あるなりと信か和名抄小膳和名保之

飲酒の時食雜米をいふ名なり皆各郷食の雜物なり此府は鴻臚館あり蕃客を

郷食宴の例上玄蕃寮大宰府民部式守客館仕丁一人見あり大

唐通事新羅譯語に見る蕃客料小置れり古も然そ有けむ通事は推古紀

大礼小野臣妹子遣於大唐以鞍作福利為通事大藏式小入新羅國使の条小大

通事小通事の名あり漢籍に通謂之詠俗謂之通事といへり今も肥前國長崎港司

見の敏達紀四年小宮宮於譯語田是謂之幸玉宮とあり古事記は他田幸玉宮は

作書紀小通事譯語ふ平佐古止とあり新羅詠語を置れ始は日本後紀

小弘仁四年九月寅寅官符應信對馬嶋史生一員置新羅詠語一人事右得大宰

府解俣新羅之舟來著伴嶋言語不通來由難審彼是相疑加殺害望請

減史生一人置伴譯語者右大臣宣奉勅依請に見の猶大學寮亦此を記せり

史生二十人は府の史生あり此例は上文省文武紀大宰三年二月癸卯大宰史生更加

十員とあり式部式史生の条に此外民部式小府掌之同式小九陸奥鎮守大宰府

等府國府掌各三人每人給

職田二町綾師高野紀神護景雲三年八月丙辰始置太宰府使部は令後小置凡
と記せり綾師とあり桃文師有凡上文の織部司同かして使部は令後小置凡
類聚國史小桓武天皇延暦十六年四月戊辰大政官符應撰身補太宰府使
部等事古檢按内大政官宝龜四年八月十六日符傳太宰府使部不得過二十
人前員定四十人日本後紀大同二年正月壬寅官符傳太宰府解傳檢例帳稱
直府使部二百人散位一百人四月上旬使部九十許人書生十許人量其官
位分為三等以正稅稻給借債云云兵部式小凡太宰府官並品官史生使部
得考書生及所部國嶋並聽帶仗といへり此文より史生の員は見え仕丁は民部式小凡
太宰府充仕丁者帥卅人大貳二十人少貳十二人大少監各八人主神主三少
典博士明經博士醫師主厨各六人音博士陰陽師筆師主船各五人大唐通
事四人史生新羅譯語奴弓師兼仗各三人府衛四人學授二人藏司二人稅倉二
人藥司一人匠司一人修理器仗所一人守客館一人守辰六人守驛館一人儲料
二十人並准諸國事力其食皆充庸米若有仕丁情願酬庸者並以黑絹卅

介為限不得因此過收と仕丁の員あり見えり此文にて官人の事を窺ひある
わられつる藥司は此府小藥園あり其司あり此中府掌綾師の見えぬ後小停
府十二種大宰使附別貢使民部式小藥園駐使二十人あり兼仗事力の事は軍防令
小云元正紀靈龜元年八月己未制太宰府官人家口皆免課役の制を記せり後
も同此府は官人の員多く公解も饒夥ある八事の序小記さへといふ主稅式
諸國正公筑前筑後肥前肥後豊前豊後等六國府官公解一百萬束といへり此
雜稻の条筑前筑後肥前肥後豊前豊後等六國府官公解一百萬束といへり此
解は六國小散在る同式小凡大宰府處分公解帥十分大貳六分半少貳五分
を聚め合せてかちり
監三分典二分主神主工博士明法博士音博士各一分大半主城陰陽師等
師醫師主厨主船一分半大唐通事一分半少史生弩師新羅譯語兼仗一
分と見えり官人大貳各一人少貳大少監大少典各二人明經博士一人明法博士
生二十人兼仗五十四人大各一人少三人主城陰陽師弩師醫師主厨主船詠語音博士各一人史
其員も一百人小何まる此制も合法を知らず公營田と云あり公田と營殖て府
中の雜事充るあり三代實錄貞觀十五年十二月太宰府奏言云去貞觀十
一年新羅竊窺我辺云云今所用糧米無闕出納有勾當然以朝多資給猶多煩

焉已置吏胥計口治之至乃其餘觸類猥雜故件國割女子口分為公官田而其所
遺猶倍他國須分置一百町名警固田如其耕官收所輸之地子充年中雜用
又自府儲三万束以至於使糧並水脚賃及厨家雜用凡百庶事總有其中矣
諸國之備各色數或違期又或不進須分置一百町名府儲田取其地子以充府
用と見えより吏胥は輕職の雜色といへり主税式修理府官舍料六國各三千束
あり上文小いへる警固田府儲田の
中より輸せし見えたり記せり

大國

守一人掌祠社戶口簿帳字養百姓勸課農桑糾察

所部貢奉孝義田宅良賤訴訟租調倉廩徭役兵士

器仗鼓吹郵驛傳馬烽候城牧過所公私馬牛關遺

雜物及寺僧尼名籍事餘守准此

其陸奥出羽越後等國兼知饗給謂饗食並給祿也征討

候謂乍遂也言候壹岐對馬日向薩摩大隅等國惣

知鎮捍謂捍衛也言防守及蕃客歸化

三關國又掌關謂依律關者檢判之處及關契事

介一人掌同守餘介准此大掾一人掌糾判國內審
署文案勾稽失察非違餘掾准此少掾一人掌同大
掾大目一人掌受事上抄勘署文案檢出稽失讀申
公文餘目准此少目一人掌同大目史生三人
上國 守一人内一人掾一人目一人史生三人
中國 守一人掾一人目一人史生三人

下國 守一人目一人史生三人

大國諸國を大上中下の四等に分ち始は詳ふ不知なり天武紀十二年十二月
丙寅遣諸五位伊勢王大錦下羽田公八國並判官錄史工匠等巡行天下
限分諸國之境然是年不堪限分十三年十月辛巳遣伊勢王等定諸國境
此時もやある古事記成務段に定大國中國之國造亦定給國國之界又大縣小縣之縣主とありて古の例に依りて取らる
定めはいろいろありて今文より見ると是れ考へて戸令に凡郡以上は里以下十六
里以上は郡の制とありて令文に其
制見えて後の制は比例に違ふも多し其定めは事あり唐六典戸部尚書の
云ふに六雄州十望州を大國と定め戸滿四万以上は上州中州戸三万以上は下州戸不
滿二万者為下州と戸數を以ていへり皇制に大上中下四等も唐制に模して此例
に依るべきやと按る其地廣く田疇多しは戸數租税も饒盛なり狹隘の地
は戸口調賦も減少の理あり戸調租の三色實を以て大國と定むべきやあるむ
田令に凡國郡界内所部受田悉足者為實郷此大正元年新令施行の日諸國の名
不足者為狹郷とある實狹も大小の制を以てあり

は悉く計へ知るべき便あり類聚國史第八文武天皇七年十一月庚辰制諸國公

解大國四十万束上國三十万束といふ制見ゆれば公解の束數亦依て定められ

ときこゆふあり但文武天皇七年といふは誤りなり日本後紀延暦十四年九月乙

卯以肥後國為大國日本紀畧弘仁二年二月昇上野國為大類聚三氏格不

課丁田疇其數差益弘仁十四年二月割越前二郡置加賀國至天長二年正月以

昇中國為上國とあるは其制小叶へる故ふむ課戸田疇小れりを見る

後の制ふら民部式小凡下野讚岐等國准大國聽廿九戸例損といひ此二國ハ

を公解上國の制小超同式小記せる大國は大和河内伊勢武藏上總下總常陸

近江上野陸奥越前播磨肥後等十三國あり此中陸奥は三代格小延暦十七

令後の制あり民部式小大和國管郡十五正稅公解各二十萬束河内國管十四

正公各十四万九千束伊勢國管郡十三正公各三十万束武藏國管郡二十一正公各

四十万束上總國管郡十一正公各四十万束下總國管郡十一正公各四十万束

常陸國管郡十一正公各五十万束近江國管郡十二正公各四十万束上野國管郡

十四正公各五十万束陸奥國管郡三十五正公六十万束公解八十万三千七百

十五束越前國管郡六正公各四十万束播磨國管郡十二正公各四十万束肥後國

管郡十四正公四十万束以下三十万束以上と見ゆれば過不及の差別なきはあり

常陸陸奥播磨の三國ハ本制小過て大和河内の兩國ハ足らざる故ハ復制あるべし

と中國の例稱ふり又其郡は餘國小同一に准へる制小あり人うと思ふ越前の管郡

六は不及と云ふ古清撰を定めぬを知らず國守は和名抄小長官國守とあり此以下職掌は國司

の詳小其職を記國司の始は孝德紀大化元年八月庚子拜東國等國司同二年正

月甲子詔小初置畿内國司郡司と制度あり別臣連伴造國造の國郡を治むる

悉く罷めて國別小國司を置まざる初めなり仁德紀六十二年小遠江國司女閑

清寧紀小播磨國司と孝德御代以前小國司郡司の名此被見ゆれば既に天武紀五年正

月甲子詔曰凡任國司者除畿内及陸奥長門國以外皆任大山位以下人となり

元明紀和銅六年五月小詔五畿七道各其國郡必取好字と見ゆ猶國郡の義は

戸口簿帳は戸籍田籍計帳輸租帳校田帳授口帳四季帳の類とて其國より

大政官小申す簿帳をいふ猶下式令小なり字養百姓を考課令小凡國郡

司撫育有方戸口増益者云とある此字養云下桓武紀延暦五年六月乙未朔

勸撫百姓糾察部内國郡官司同職掌也とあり猶京職の勸課農桑は攝津職

とあり

小いり考課令勸課田農能使豐殖云進考一等なり 亂察所部は部内の
百姓非違より奸盜を糾し檢察するといふ 下文大掾の職を察 關市令小凡官私權

衡度量歲以仲春造大藏平校焉其不在於京則平校於國司然後聽
用文武紀大造二年三月乙亥始頒度量于天下と見えて國司本様あるは民間の

私に平校せし用ふ類は非違と云ふ 倉廩は米廩穀藏義倉不動倉

の類なり 義倉不動倉官稻 主計式小正倉若干字 正税の法倉若干字 甲倉板倉 乙倉土倉

の事ハ賦役令云一 屋倉 借倉若干字 出奉稻 不動若干字 穀倉粟倉精倉 穀倉 動用若干字 穀倉 粟倉

精倉穀 此倉は京國職司みふ有 元明紀和銅七年四月壬午大政官奏諸國
造倉率三等大受四千斛中參千斛小貳千斛三等の格見之桓武紀延暦

十年二月癸卯制諸國倉庫不可相接一倉失火令院燒盡於是勅自今以後

新造倉庫各相去十丈以上隨處寬狹量置之と見え倉鑰は文武紀大

造二年二月乙丑諸國司等始給鑰而罷 先是別有稅司主鑰至是始給國司焉 細書あはれ以前ハ稅司主鑰を置て國

司ハ出納せし此時より始て倉庫を物領する事なり 齊帝紀ハ天平

後世ハ國司を受領といふ印鑰を長官の受て物領せしかる俗語なり 寶字七年三月丁卯令天下諸國進不動倉鈎匙以國司交替因茲多煩也とあり

此不動倉匙ハ典鑰の条ハ民部省に收掌する其条より 主計式ハ不動倉鑰若干鈎 鈎鑰若干

和名抄ハ鈎匙和名賀岐とありて鑰の類なり ハコシヤケ 主計式ハ不動倉鑰若干鈎 鈎鑰若干

鈎動用鑰若干印若干面と見え不動ハ動奉する稱ハ對て動用ハ常例をして

出納の稱なり 印ハ國印も詳なり 徭役は歲役と國內の雜徭あり 兵士は

其國ある軍團の兵士あり 器仗ハ國郡の武庫に貯小兵器あり 軍團別ハ武

番役の事軍 防令ハ見之令後小器仗を諸國に造り進する制なり此器仗ハ孝德

紀ハ大化二年正月遣使者詔郡國修營兵庫と始て見えて諸國ハ兵庫あり

軍防令ハ凡國司每年孟冬簡閱戎具又云戎具等並貯當色庫とあり

當色ハ軍團 鼓吹ハ軍防令ハ凡軍團置鼓二面大角二口小角四口民部

式ハ凡諸國國別置鼓生二人大角生五人小角生三人並免課役とあり

郵驛ハ上預津職 ハ云 兵部式ハ凡諸驛家令國郡司專當其名每年附帳

推古九年九月辛巳朔
戊子難羅之同謀者
多到對馬則捕以貢之

近地之開刻を作り兵士を成るめ遠く謀令を出て寇賊の動静を窺はしめ襲来る
を知り兵備を設け防禦を怠るをいふる下
斥候は今の遠見す細作といふ如く
漢書李廣傳斥候注斥度也候視
望地といひ書紀不閑謀を
字加美比止とあるを
也と開く美我あ
け逐意は
註小作を遂く非常を候ひ逐ふ云い誤りあり
字書景
作開拓

壹岐對馬日向薩摩大隅等國は西辺の要地也異國不對ハ
一条の海を隔てゝ處なり武部式不壹岐對馬為迎要は海中不在て新羅國といひ
近き故あり
鎮守は寇賊を鎮成り守衛の意あり
唐書李鎮將成主堂捍防守禦とある不
同義あり
防守ハ此五國ハ防人をして守る

同十年十一月癸卯對馬國司遣使於筑紫大宰府言云唐國使人郭務悰等
六百人送沙宅孫登等一千四百人物心合二千八人乘船四十七隻俱泊於比智嶋
相謂之曰今吾輩人船數衆忽然到彼恐彼防人驚駭射戰乃遣道文等豫披陳來

朝之意と見え文武紀大宰二年十月下西唱更國司等言於國內要害之地建柵置戍守之
許焉あり
細書小令薩
摩國に記す
蕃客歸化は戸令不化外歸化者所在國郡給衣糧具狀

唱更拾芥抄改名所
々部薩戸元唱更
史記吳王濞伝其居口以銅鹽故百姓无賦率踐更輒平賈正免踐更若令唱更一行更者也

式小凡太宰於兩嶋樹牌具顯著嶋名及泊船處有水處並去就行程遙見嶋名
仍令漂著船人必知有所歸向とある漂船の料不樹
海辺の五國は蕃船の
歸化漂流多かり

歸化の義は上太宰府
小云一
惣領より上兼知云ハ迎要國の守別掌ふ
小別記せるあり
西辺ハ柳食給の事をい
太宰府の所故ふ
三関國ハ伊勢越前美濃の三國ハ

關あるを高野紀天平神護元年三月丙申勅小伊勢美濃越前前者是年関之國也
軍防令ハ凡置関應守固者並置配兵士分番上下其三関者設鼓吹軍器國

司分番守固と見えて非常の難小設けり鎮成あり
関ハ境上の保障あり皇國
夷地の中外を隔て據險守固の處をいふ
孝德紀ハ関塞とある此関は人物往還を檢察
塞は即ち保障と云り

又非違を判斷して出入を許可する制あり註檢判之處と云り
好客邪物の出
刻て
塹を穿ち木柵を建るをいふ
唐律の注ハ堀地為長坑名之塹編木防往來者名之柵
柵とあり塹は関舎を廻る保利柵は木を編みたる佐久

といふ上より出羽柵船柵といふ柵も此類なり 要地守固元明紀和銅二年九月己卯の障域をふ

遣從五位下藤原朝臣房前千東海東山檢察關刻巡省風俗齊帝紀天平宝字

三年十月戊申伊勢志摩兩國相争於是遷扈乘刻於葦淵尾垂山今名あり此誤り或説志摩國畔來村といふ其地遠く隔るに然らば葦淵今の押淵村の古名あり村の北方の山は鬼ヶ城といふ地あり險要の處あり是處よりあり

關契は關所出入の木契なり 官使は木契をもて關所の契を合せ驗し自餘の過所を用ふ 漢書注小昂為縛刻木為契二物通謂之傳

傳如今過所と見ふ何處も關所と切手を用ふは同 孝德紀大化二年詔凡諸國及關給鈴

契並長官執無次官執軍防令其三關國各給關契二枚三代實錄天安二年

八月廿七日乙卯云先是二十六日甲寅遣使於伊勢近江美濃等國賁勅符木契警固

諸關あり猶下官衛令契の義云々 此三關を置けりは孝德持統文武文武の四御代攝津大和の二國小都を定めり

此制の限より天智御代の近江は都を建は其國の四面は關を置けり

後世は沿革をみる唐志より京四面關有驛道者為上關無驛道者為中關餘

為下關と云々制を摸せるより天武紀八年十一月小初置關於龍田大山とあるを取

て以前天智の御制を用ひたりあり四面と東は伊勢國鈴鹿西は近江國合坂南はあつて

美濃國不破北は越前國愛発あり皆驛道不通せり 今ハ國の次官

近江京の置置て自餘の京は定めあり此三關は桓武の御世に罷り

あり神祇大副太宰大貳の職の例として異記せるは國職の始めたる故なり 下條 條目より本誌に具注は同義を

主税式小凡國司巡行部内者國公以上倭伏三人椽以下二人史生如前は

人なり 大少椽は判官より察非違は上太宰府大監註其諸國判官察非違亦同此

義あり 三代格小延暦十七年六月定陸奥國官員守人介一人椽一人と云々八國を建

二月加越前椽一員肥後椽一員 大少目ハ主典より履中紀四年八月戊戌始に於

諸國置國史記言事達四方之志と見れり 記事官は既に諸國に在り 光仁

宝龜六年三月乙未始置伊勢國省武藏下総陸奥越前播磨肥後 史生を置け

一は此文小三員より聖武紀小神龜五年八月壬申大政官議奏改定諸國史生大國

四人上國三人中下國二人以六考成撰滿即興替とあり 今文より大上中下諸國各三人あり高野紀天

平神護元年五月乙丑大政官奏曰准令國無大小一定數祖據神龜五年八月九

日格史生之員隨國大小各有差等擢取之人繕寫之才堪任者衆人多官少

莫能通用朝議平章云其史生者國別格外置二員と見れり 此格より員外史

生を始て置けり

光仁紀宝龜六年六月癸亥朔解却畿内員外史生以上より以上とあるは守以下諸
國員外史生は同十年六月丙申大政官奏小謹檢令條云神龜五年八月五月格曰
云云又天平神護二年四月二十六日格云其史生者國別格永加置二人而今望者既多
官員猶少因茲國無定準任用淆乱臣等商量隨國大小增減員數大國五人
上國四人中國三人下國二人其遷代之法一依天平宝字二年十月廿五日勅以四
歲為限制を立り別格任用は式部式凡諸國史生者大國五人上
國四人中國三人下國二人と記せり同式史生不得在當國人の制あり三代實錄小
貞觀十四年五月陰陽解云武藏權史生屋代直
行と云 國堂を置りは類聚三代格王貞觀十二年十月日置美作國堂二人十
一月四日壬子河内伯耆兩國置國堂十二月上總國置國堂二員把勢因幡國堂一
員とあり土は去年十二月置出羽國堂一員と始て制あり其國大小を申請
まゝ置りふむ此外猶有けり 勢師を置るハ

類聚國史小延暦十六年永停勢師と弘仁五年五月より置り

一は下軍團云一 上國六民部式上國山城攝津尾張美濃河遠江駿河田斐相
模美濃信濃下野出羽加賀越中越後丹波但馬因幡伯耆出雲美作備前備
中備後安藝周防紀伊阿波讃岐伊豫筑前筑後豊前豊後肥前と三十五
國を載り 同式山城國管郡八正公各十五万束攝津國管郡十三正公各十八
万五千束駿河國管郡七正稅廿三万束公解廿五万束尾張國管郡
八正公各廿万束參河國管郡正公各廿四万束美濃國管郡十八正公遠江國
管郡十三正公各廿八万束田斐國管郡四正公各廿四万束相模國管郡八正公各廿
四万束信濃國管郡十正公各廿五万束下野國管郡九正公各廿万束出羽國管郡
十二正稅廿万束公解廿四万束加賀國管郡四正公各廿万束越中管郡四正公各廿万
束越後國管郡七正公各廿三万束丹波國管郡六正稅廿三万束公解廿五万束但馬
國管郡八正公各廿四万束因幡國管郡七正公各廿万束伯耆國管郡六正公各廿五万
束出雲國管郡十正廿六万束公解廿万束美作國管郡七正公各廿万束備前國管
郡八正公各廿八万束備中管郡九正公各廿万束備後國管郡十四正
公各廿四万束安藝國管郡八正廿三万束公解廿八万束周防國管郡六正公
各廿一萬束紀伊國管郡七正公各十七万束阿波國管郡九正公各廿万束讚岐國
管郡十一正公各三十五万束伊豫國管郡十四正公各廿万束筑前國管郡十五
正公各廿万束筑後國管郡十正公各廿万束豊前國管郡八正公各廿万束豊後國
管郡八正公各廿五万束肥前 三十万以下廿万束以上上國と定めり 此中小
羽越後但馬備前讚岐の六國は廿万束以上上國の制と過り 和名抄も信濃
正公各三十五万束出羽正三十五万束公解四十万束越後正公各三十三万束但馬

正公各三十四万束備前正公各三十八万束と見ゆれ、大國の制を古く正公より少く
なり、後増えしものあり、山城攝津は正公多しとて、畿内の制より多し、管郡も
多少定む、攝津は十三備後伊豫十四筑前十五筑後、此中攝津出羽加賀美作
甲斐加賀越中四郡あり、美濃は十八郡あり、及ぶもの多し、

筑前五國は令後置けり、延暦十三年攝津國和銅五年出羽國弘仁十四年加賀國和銅六年美作國を置け筑前國を

大同三年五月甲申官奏、置筑前國事、實は三十國と云へり、一人三代實

守員八員、掾一員、少目各二員と見ゆ、一人三代實

觀七年五月置甲斐、天平宝字元年五月但馬加介一員

三代實、天長七年十二月置出羽、少目

天安三年四月置下野、目一人馬因幡伯耆美作備前阿波讚岐伊豫等國少目

天長紀、天平宝字元年五月出雲加目一員類聚三代格、仁壽三年六月加駿河安藝紀伊三國目各一員、仁壽二年二月加甲斐目一員、天長七年十二月置出羽、少目

とあり、目太少、史生三人、光仁紀宝龜六年の格より上國史生四人、式部式史生

四人、但遠に美濃讚岐等國、准大國並不得任、當國人より等國は出羽信濃越後但馬備前を

し入へり、正公の多き故より、中國は民部式より中國安房若狹能登佐渡石見丹後長

門土佐日向大隅薩摩と十一國を載、安房國管郡四正公各十五万束若狹國管郡三正公各九万束能登國管郡四

正公正公各十五万束佐渡國管郡三正稅三万八千束公解八万束丹後國管郡五正公各十七万束石見國管郡六正公各十五万束長門國管郡五正公各十五万束

土佐國管郡七正公各廿万束日向管郡五正公各十五万束大隅國十五万以下八

管郡八正八万六千束公八万五千束薩摩國管郡十二正公各八万五千束

万束以上を中國と云へり、此中土佐國は多々上國の例、此中安房能登丹後大隅薩摩は管郡より多し、其の例、此中安房能登丹後大隅

の四國は後の制あり、養老二年安房能登和銅其の例、此中安房能登丹後大隅薩摩は管郡より多し、其の例、此中安房能登丹後大隅

長門國修理官舍科二万束、豐前國官舍修理料六千束とあり、津館在又云長

門國兵糧料四万束、津館在又云長

錢司俸料二万八千束とあり、長門國防の鑄錢司料稻ふり、奉は官人の料、拾は抄弘仁九

年改、長門國為鑄

錢司とあり、三代格、貞觀七年五月置能登

類聚三代格、大同四年二月置佐渡隱岐二國、掾以其在辺遠而官

人乏、少上之人有故則主典代而掌印求之事理不穩便也、佐渡も

の制より介掾あり、此

時、掾置て中國とあり、目一人史生三人、光仁紀宝龜六年の格より史生中

國三人、式部式より諸國史生者中國三人、甲斐出羽安藝周防紀伊等

若狹三方、遠敷、大飯、佐渡、難太、加茂、羽茂

此若狹佐渡兩國は各三郡より管領の少き故あり

○史生三人光仁
紀宝龜六年
格下國史生
三式部式
同

下國、民部式、下國和泉伊賀志摩伊豆飛彈隱岐淡路壹岐對馬、九
國、和泉國管郡三正公各八万束伊賀國管郡四正公各十三万五千束志
摩國管郡二正稅穀一千二百斛伊豆國管郡三正公各六万二千束飛彈
國管郡三正公各四万束隱岐國管郡四正稅二万束公解四万束淡路國管郡二正
稅三万五千束公解四万五千束壹岐國管郡二正稅一万五千束公解五万束對馬
管郡二正稅三万束以下下國云々此中伊賀國其制過對馬、一万束和
泉國のみ令後小立れり、靈龜三年壹岐對馬は辺要の國を撰叙令、壹岐對馬
守者雖獨關猶馳驛之例あり、守人目一人、かくて諸國を大上中下の四等小定
官員少を故也
中國三員、次官ハ下國三員、次官ハ此諸國をて五十四國三島と云ふ、多祿島、其公
解分法主稅式小大上國長官六分次官四分判官主典二分史生一分中國無分則
長官五分下國無椽則長官四分員外司者
名准當員と記せり、和名抄小史生今案信局以上
者蓋倭断之合法長官五分次官四分判官三分主典二分史生
一分之義也諸國醫師博士醫師一分之類也云々志摩對馬兩國ハ
主稅式小凡志摩國公解料用尾張國緣海郡正稅穀守三百石目百五十石史生

七十五石、下は束稻穀と給
下國の法數ふる、九大宰所管諸國充對馬嶋司と有りて其束數記
下國の志摩國猶公解の義は下雜令云々

大郡

大領一人、掌撫養、スルーヲ所部、スルーヲ檢察郡、スルーヲ境事、スルーヲ餘領准此、スルーヲ少領

一人、掌同大領、スルーヲ主政三人、掌糾判、スルーヲ郡内審署文案、スルーヲ

勾稽失察、スルーヲ非違餘、スルーヲ主政准此、スルーヲ主帳三人、掌受事、スルーヲ上抄

勘署文案、スルーヲ檢出稽失、スルーヲ讀申公文、スルーヲ餘主帳准此、スルーヲ

上郡 大領一人、少領一人、主政二人、主帳二人、

中郡 大領一人、少領一人、主政一人、主帳一人、

下郡 大領一人、少領一人、主帳一人、

小郡 領一人、主帳一人、

大郡司十六鄉以上を惣領の職なり 此事ハ下郡の始ハ孝德紀大化二年正月甲子詔
初置畿内國司郡司云凡郡以四十里為大郡三十里以下四里以上為中郡三
里為小郡と三等小定めり 又凡郡以二十里以下十六里以上為大郡十重
以上為上郡八里以上為中郡四里以上為下郡二里以上為小郡と五等小定めり

此文ハ孝德紀の冊里ハ廿里の誤寫ハ唐の制ハ縣ハ五等小定めりハ六典
戸部条ハ沙縣其餘則六千戸以上為上縣二千戸以上為中縣千戸以上為中
下縣不滿千戸皆為下縣とハ望縣ハ大國ハ望州と
景行紀小年魚市郡沖京紀小淡郡雄略紀小餘社郡安閑紀元年小大河内直
味張自今以後勿預郡司とハ味張ハ大河内國造ときニカク郡司とハカク郡の
見ゆるハ後の 下戸令云云 大領ハ和名抄ニ長官郡曰大領次官郡曰少領と
追書云云

あり孝德紀大化二年詔其郡司並取國造性識清廉堪時務者為大領少領云其大領少領方用同者先取國
造類聚國史延暦十七年詔小昔難波朝廷始置諸郡仍擇有勞補於郡領
永任其官とあり 國造有勞の家ヲ撰み任まは此郡司ハ其國ハ隸ハ國司官
伴部小名負氏令用ふ同 小申式部省補任の例は考課令小國司每年量郡司行能功過立三等考第云具記
附朝集使送省官位令小郡司相當ふ 式部式凡補任郡司者六月廿日以前為限ハ諸
國郡司補任之後皆移民部省凡郡司補元明紀和銅六年五月己巳制夫郡司大少
任之後三年頻不附考帳者解任といへり 領以終身為限非遷代之任而不善國司情有愛憎以非為是強云致仕集理解却

自今以後不得更然ルヲ見ル式部式小凡郡司有開國司詮擬歷名附朝集使申
上其病患年老及致仕者國司解却具狀申官更不
責手實ニ其
制度ニ員外の郡司を擬太少領といふ文武紀二年三月庚午任諸國司因

詔諸國司等銓擬郡司勿有偏黨郡司居任必須如法自今以後不得違越ト何レ議
の義ニ擬郡司の號は始りけむ擬は後ノ權ト云々同神龜五年ト見ル此
ハ下ハ聖武紀天平十四年五月庚午制ハ擬郡司少領以上者國司史生以上英知

簡定必取當郡推服比郡知聞者每司依員貢奉如有願迴濫舉者當時國
司隨事科決ト同天平六年四月丁巳禁斷ハ以年七
三格ハ以上人新擬郡司の制ハ見ル三代格ハ延暦十六年十一月

戊申大政官符停止轉擬郡司向京事右得武藏國解僞案神龜五年四月二十
三日格ハ銓擬郡司自今以後轉任少領擬大領關者待有堪用新人然後一時

轉擬者因茲轉擬新擬相共參朝而收納正稅云々請新擬少領依期貢上
轉擬大領留國務云々依請ト此ハ按ハ貢稅使の向京の日
郡司ハ徒行ハ參朝ト記ス同十七年二月丙寅

大政官符應禁斷副擬郡司事右破大納言從三位神王宣稱奉勅郡司之員明

具令條而諸國司等一員有闕便擬數人正員之外更置副擬無益公務已潤

私門侵損百姓莫過斯甚自今以後簡堪時務者擬用闕處正任之外不得

復副ト副擬の郡司ハ停止ハられル式部式小凡大領關處以少領轉任以今
擬者為少領其大少領並關先擬少領ト此格ハ擬用闕處の義ハいハる

擬ハ特任の
意ハいハる此後ハ陸奥出羽の要國のみ聽ハはル類聚三代格ハ大同元年九月

辛未官符聽陸奥出羽兩國正員之外擬任郡司軍役事ト見ル撫養所部
ハ字養百姓ト同ハ所部は郡内あり
檢察郡境ハ板本ハ郡領ト作ル誤リ

文ハ其義ハ通サ郡里ハ依テ按テ檢テ戸令ハ其郡境内田疇開產業脩ル礼
教設禁令行者為郡領之能入其境人窮匱農事荒好盜起訟獄繁者為

郡領之不能ハ檢察の義ハ明ラむハ郡境は郡内
主政は郡の判官ハ判官の掌ハ具註セ判官の例は郡職の始ハ故ハ以下ハ式部式小凡主
政主帳知勝船事並用音ハ古ク音讀ハ用ハ和名抄ハ主政ハ万
孝德紀ハ大化二

年詔云強幹聰敏工書算者為主政主帳選叙令も同同武部省判任あり元明紀和銅五年四月丁巳詔先是郡司主政主帳者國司使任便申送名帳隨而處分事有率法自今以後宜見其正身准式試練然後補任應請官裁とありて元正紀養老二年四月癸酉大政官處分凡主政主帳者官之判補出身灼然而以理解任更從白丁前勞徒廢後苦實多於義商量共違道理宜依出身之法雖解見任猶上國府令續其勞内外散位仍免雜徭とあり勞字の下如字何る一脱いふや又以理解任は病解喪解ある一犯罪一解任とあり此恩制あるなりかくて同三年六月辛未初令諸國史生主政主帳把笏焉と制をさし式部式小凡主政帳廿一人毎年充大政官侍所下名簿及補之す凡郡領之民不得任主政主帳といへり主帳は郡の主典あり委く政の条あり上中下郡は十五里以下二里以上四等あると戸令ふいふ如く其職員大郡八員大少領各二員上郡六員大少領各二員中郡四員大少領以下下郡三員大少領主主政帳各六員主政帳各三員各員下郡三員大少領主帳各員小郡二員大少領主帳各員差降あり國司の官員と幾許違はる聖武紀天平十一年五月甲寅詔曰諸國郡司

徒多員數無益在任用侵損百姓為盡實深仍省旧員改定大郡大領少領主政各二人主帳二人上郡大領少領主帳各一人中郡大領少領主帳各一人下郡大領少領主帳各一人等小減省せしめ大郡五人上郡四人中下各一人諸國の郡數いと多かるけしと大宰養老の制は知るべきなり主計式小五百八十郡和名抄小五百九十八郡神皇正統紀小五百九十四郡と記す

軍團

大毅一人掌檢校兵士充備戎具謂充備兵士之戎具也調習

弓馬簡閱陣列謂檢閱軍行之陣列也事少毅二人掌同大毅

主帳一人校尉五人旅師十人隊正二十一人

十八年十軍團を置
けり
元正紀
養老二年
冬十月
戊戌
減定
京畿
七道
令守之
と云々

軍團は國別小兵士の武藝を講習の處にて團は草舎あり講習は俗に稽古云々如
唐百官志小府兵三百人團字は集聚の義を取
為團といふ一聚の義あり孝德紀大化二年正月云是月遣使者詔郡國脩營兵庫と
ある此團の始めりある兵庫は即ち軍團の庫なり元正紀養老二年冬十月戊戌減定京畿七道
諸國軍團並大小殺兵士等數有差但志摩若狹淡路三國兵士並停軍團兵
の制は詳かた三國聖武紀天平十二年六月癸未緣停兵士國府兵庫點自丁作番
は此時小停めりなり士減少
令守之と云々諸國悉く罷れり同十八年十二月丁巳京畿内及諸國兵士
の國は猶置れり聖武紀神龜五年四月丁丑陸奥國請新置白河軍團又改丹
取軍團為王作團並許之白河名取王造は高野紀天平神護元年七月己卯近江國
志賀團あり後小置れり陸奥の郡名なり高野紀天平神護元年七月己卯近江國
其紀小見之祖父藤原前大政大臣淡海公の封を給ふ皆押勝の所為と主稅式陸
其謀發覺の後小近江國小本去を按ふ此人の請奏て此軍團を立つるなり
奥七團軍殺主帳世五人糧米准太宰府統領以正稅給之七團は七處小民部式小
凡佐渡國雜太團軍殺職田二町主帳一町と見え此西國のみ残れり和名抄小佐渡國
陸奥國の七團も後小絶るなり按武紀延暦元年六月勅曰蝦夷亂常為梗云云
今聞坂東國兵屬軍役時方多羸弱全不堪戰即有雜色浮浪之類或便騎射或耐戰
陣每有微發未嘗點之同日皇民豈可知此乎と見え此騷亂年を経て停た延暦廿
年より討平く事を得るは諸國軍團を停められ兵士ふき故なる此後永喜年中
阿倍賴時其子貞任の亂も東國の士民を徵發の勅符を下り陸奥國不到り云々
大殺の殺は春秋左氏傳は殺敵曰果致果曰殺と美號を取るなり唐志小軍府小折衝都尉別將果殺軍團あり
大殺を長官少殺を次官と云一兵部省兵士以上名帳註小其大少殺為外武官とあり此
故より元正紀養老三年四月乙酉制諸大少殺量其任共主政同自今以後為判官任
主政は郡の判官なり六月辛酉初令大少殺把勘焉と見え孝謙紀天平宝字元年正月甲寅詔曰
此者郡領軍殺任用白丁由此民習居家求官未識云自今以後宜令所司除有停人
不得入簡試例其軍殺者選六衛府中器量辨了身才勇健者擬任之他色之
徒勿使濫訴自餘諸事猶如格令と此頃軍殺の衰へり知る下六衛府五府
は武備の怠慢なり光仁紀宝龜十一年三月大政官奏言濟世興化是有元功討
罪威迎亦自七德文武道廢不可令也諸國兵士方多羸弱徒免身庸不輸天府

陸奥國の七團も後小絶るなり
今聞坂東國兵屬軍役時方多羸弱全不堪戰即有雜色浮浪之類或便騎射或耐戰
陣每有微發未嘗點之同日皇民豈可知此乎と見え此騷亂年を経て停た延暦廿
年より討平く事を得るは諸國軍團を停められ兵士ふき故なる此後永喜年中
阿倍賴時其子貞任の亂も東國の士民を徵發の勅符を下り陸奥國不到り云々
大殺の殺は春秋左氏傳は殺敵曰果致果曰殺と美號を取るなり
大殺を長官少殺を次官と云一兵部省兵士以上名帳註小其大少殺為外武官とあり此
故より元正紀養老三年四月乙酉制諸大少殺量其任共主政同自今以後為判官任
主政は郡の判官なり六月辛酉初令大少殺把勘焉と見え孝謙紀天平宝字元年正月甲寅詔曰
此者郡領軍殺任用白丁由此民習居家求官未識云自今以後宜令所司除有停人
不得入簡試例其軍殺者選六衛府中器量辨了身才勇健者擬任之他色之
徒勿使濫訴自餘諸事猶如格令と此頃軍殺の衰へり知る下六衛府五府
は武備の怠慢なり光仁紀宝龜十一年三月大政官奏言濟世興化是有元功討
罪威迎亦自七德文武道廢不可令也諸國兵士方多羸弱徒免身庸不輸天府

國司軍毅身憚駐役曾無貫習空給戎馬以充刈薪以此赴戰是謂棄民臣等謂
三関及辺要之外隨邦大小為額而點豪民堪弓馬者每其當番專習武藝
属有徵發莫免替廢羸弱之徒勤皆入農此所以設守備而省不急之奏可之
此時諸國軍毅も停めりしこ兵部式凡軍毅其身任弱不堪武藝
者國司解任具狀申官官下知省除簿とあるは陸奥七團の制なる一 檢校兵
士は長官の職あり 充備戎具は兵器を人別充て其身も備へるは軍防令
戎具註小國內百姓隨身弓箭刀劍等之属也とあり 按小百姓もあらず 同令小毎一隊
定強壯者二人分死努手も充備ふ義あり 兵士と平く云へり

調習弓馬の調習は上左馬 寮小いへり考課令小兵衛便習弓馬者為
上不習弓馬為下と見えて弓馬は騎射あり天武紀十三年壬四月丙戌
詔小凡政要者軍事也是以文武官諸人務習用兵及乘馬云有馬者為騎
士無馬者為步卒並當試練と見えて古へ専ら騎射を習ふと常小て兵士は更

今も武藝を弓馬の
術といふ事を知り

簡閱陣列は軍陳隊伍の列立をいふ即ち戰陳
は兵士小教習はめ其試練を閱て其才能を簡ふなり 大學館小て學
生を試むるも同 天武紀小

十三年十月丁亥詔諸國習陣法持統紀小七年十二月丙子遣陣法博士
等教習諸國とありて此時兵士小教え始めたり 陣法博士は陣法をよく
しれり人をいふなる一

主帳は軍團の記事官なり 郡領の主帳 軍防令小主帳者取工於書筆者為
之考課令軍團少毅以上註小其主帳者不在得考と見ゆ高野紀神護景

雲三年九月丁卯任諸國郡主帳者爵一級とあるは別勅ある一 兵部式小
其主帳者大團二人 校尉は軍校の尉を號し負へるある校尉は一隊の校
尉は尉小尉小尉者武官之稱 尉は尉小尉小尉者武官之稱 尉は尉小尉小尉者武官之稱

漢籍小校者管壘之稱也 尉は尉小尉小尉者武官之稱 尉は尉小尉小尉者武官之稱
故以軍之二部為二校とあり 尉は尉小尉小尉者武官之稱 尉は尉小尉小尉者武官之稱
稱也唐六典小尉者武官之稱 尉は尉小尉小尉者武官之稱 尉は尉小尉小尉者武官之稱
字書小尉安也慰也といへり 旅師は五百人の長をいふ 周礼注小軍五百人
云衆有二旅注小五百人為旅す晋師 隊正は軍防令小凡兵士各為隊
伍註小五人為伍五十人為隊とあり 正は長 同令小其校

博士醫師國無大小一定數但據神龜五年八月五日格史生員隨國大小各有
等差其博士者惣三四國一人醫師者每國一人今經術之道成業者寡空設
職員擢取之人繕寫之才堪任者衆人多官少莫能通用朝議平章博士惣國
一依前格醫師兼任更建新例職田事力公解之類並給正國不給兼處有料
之國名為正任無料之國名為兼任其史生者博士醫師兼任之國國別格外
加置一人庶令經術之士周遍宣揚功勞之人普蒙霑潤奏可三四國博士
一人ふは生徒の業も空くゆへに新制をたてるゆへにふは光仁紀室龜
十年六月丙申大政官奏曰謹檢令條國無大小每國置史生三人博士醫師各二人
神龜五年八月五日格云史生但博士者惣三四國一人醫師每國一人又天平神
護二年四月二十六日格云博士惣國一依前格醫師兼任更建新例其史生者博士
醫師兼任之國別永加置二人臣等商量云其博士醫師兼國者學生勞於
齋粮病人困於救療望請每國各置一人並以次考遷自今立為恒例謹

錄奏聞伏聽天裁者奏可之見按前格の新例博士醫師のふは史
到り病人の急救ふは此後はいふふは類聚三人格は弘仁十三年十二月格
別は每國の置む事奏可は此後はいふふは類聚三人格は弘仁十三年十二月格
云省史生員置博士醫師各二員大和國解備兼前例博士醫師並補之依去延暦
十六年官符而停之方今學道久廢救疾無醫望請省史生置博士醫師赦許
之五畿皆准此此時小畿内國別は始て置れは宝龜十年格以來每國は置るは奏
格は停めしつは延暦十七年六月陸奥國諸國は及はつるはや
官員を定めしつは醫師は人は事は格は見は別勅は諸國は及はつるはや
同格小長七年十一月は五畿内は志摩伊豆飛彈佐渡隱岐淡路等國は博士醫
師を置るは記は弘仁十三年三月は對馬國史生を省き博士續日本後紀は兼
和十二年七月丙寅大宰府言謹案去神龜五年八月九日格云又宝龜十年六月七日格
云立は為恒式書聞既託者夫醫師無國之任者は有救療之急也今筑後肥前
豊前豊後等五箇國去府之程二日以上七日以下雲山重疊途路艱澁吏民之
中有頓病者延著府下營受醫藥余在呼吸旦不及夕往還之間既致天殞是

則無醫師之所致也。望請國別減史生一人、置醫師一人、加以元來此府有得業生四人、准大隅薩摩日向壹岐對馬國嶋之例、監試得業及第之輩、以將充補。一切不任他人。然則巷無短折之愁、國有戶口之益者、勅宜停減史生、以典藥學生及第者補之。あつて筑後肥前肥後豊前豊後の五國の史生、員を省き、醫師一員を補ふ。東海東山二道諸國の博士醫師を補てうゝべし。見及ふべしと上文小いる諸國小准へるべきや。式部式小凡日向大隅薩摩壹岐對馬等國島博士醫師者、大宰府准大學生典藥生、試補之副、勘籍狀言上、而省載季帳。 全文ハ大宰府見ゆ、此頃西海の諸國の制も處分在て自餘の國は絶るゝべし。 學生ハ諸國經業醫術の生を兼てり業成り訖り其國の博士醫師小補任せらる。 元正紀靈龜二年格小業未成立、要永唐舉とを標めたる全文上小記、續日本後紀小 天長元年八月壬辰、官符應任國博士不限年紀、右得式部省解偶、大學寮解偶、被省去延曆八年正月十八日府云諸學生等年不滿三十不得任用國博士云、即唯論人才何拘、年齡望請、唯據前典依件任用、仍請處分者とあり。 諸國學館、春秋釋奠の事は學令小云り。

大國五十人、上國四十人、中國三十人、下國二十人、ハ學生の員差降の制あり。唐百官志小凡縣助教各一人、京縣學生五十人、上縣四十人、中下縣各三十五人、下縣二十人、とあり。縣は皇國の郡小、ゆゑ其學生の員同一さるべし。此例をうつせりやあらむ。 醫 生各減五分之四、は其員を五分して四を減せり。 たゞハ員一百人を五分して一分は二、十人さる、四分と云ハ八十人を省き、五十人を五の四分減せ、餘十人あり。 又諸國ハ陰陽師を置り、續日本後紀小嘉祥四年六月出羽國奏置陰陽師、省史生一員、始て見ゆ。類聚三代格小嘉祥四年二月官符云、出羽國解偶、出羽其陸奥、交於近戎、今雖國有大小、官有差等、至其決嫌疑、豈可彼有而此無哉。望請省史生、置陰陽師、以官員之少不省。史生而置件員、且考遷俸料、准博士醫師とあり。 類聚三代格小元慶六年陸奥鎮守三代實錄、貞觀十四年五月改武藏權史生為陰陽師、陰陽寮解云、武藏權史生屋代直行狀云、出羽武藏元無陰陽師、今依國解、以陰陽生補二國、而出羽稱陰陽師、武藏仍稱權史生者、理似不可爾。望請省置之。 同十八年七月、省下總史生一員、置陰陽師、下總國解云、國有近要、戒不

虞非占難決望請置之と見ゆ 類聚三代格寛平二年七月常陸國解云進武藏此
出羽武藏下總常陸の四國置れて自餘の國は見之凡

其書主大國八十人小國八十人
主名風五合と四其具五合
恒縣各一人京縣主五十八人土縣四十人中不縣各三十五人
大國五十八人土國四十人中國三十人

大正八年十一月謄寫ス

吉津長次郎

卷之六 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

卷之六

六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

